

はな
に
ら

土田英生

■ 登場人物

野々宮健也

赤城栄司

駿河 茂

野々宮政和

三笠明那

野々宮安音

寺田千鶴夫

寺田歩羽（ふう）

野々宮陸郎

■ 時と場所

春。ハナニラが咲く頃。それからお盆。

人口千人ほどが住む三十島（みそじま）。

島の北側にある丘陵地の麓。二軒並んで建つ家。

第一場

* * *

人口千人ほどが暮らす三十島（みそじま）。島の南側にある床山によってできた火山島だ。隣にはやや大きい多田大島があるが船で四十五分ほどかかる。

かつて、この三十島は南側の海岸を中心にサーフィンや観光で賑わった。しかし二十年前に起きた床山の噴火によって発生した火砕流によって南側は壊滅的な被害を受けた。

現在、多くの人は北側に住んでいる。

* * *

丘陵地のたもとに道を挟んだ二軒の家。

道の奥は石段になって上伸びている。

道と言っても他に通る人はなく、この二軒の家に住む者たちにとっては自分たちの敷地のような認識だ。

右側には二階建ての家（野々宮家）。

大きなウッドテラスがある。洗濯機、物干し竿、そして六足のサンダルが並んでいる。そのテラスから道を挟んだ左側には平屋（寺田家）。勝手口のドアが見えている。

四月二日の朝。

二十年前には噴火があった日だ。

寺田家の勝手口脇に置かれたイスには寺田千鶴夫が座っている。

野々宮家一階から、洗濯カゴを持った野々宮政和がテラスに出てくる。

千鶴夫 おお、お早う。

政和 あ、先生。お早うございます。

千鶴夫 うん。

政和 珍しいのです、この時間に。

千鶴夫 そう？

政和 そうですに。そんなとこで。

千鶴夫 普段は学校があるからね。

政和 ああ。

政和は洗濯機から洗い終わった衣類を洗濯カゴに移している。

千鶴夫 ……今年もこの日が来たなと思って。

政和 ですよ。

千鶴夫 もう二十年。早いもんだよ。

政和 噴火の時は、わい、まだ中学生でしたに。

千鶴夫 うん。俺、島に赴任して二年目だった。

二人は舞台奥、つまり山の方角を眺める。

千鶴夫 お兄さんは？ 東京から帰ってくるの？

政和 いや。

千鶴夫 節目の年なの？

政和は洗濯物を干し始める。

政和 (笑いながら) ま、あいつは島を捨てたようなもんですからの。

千鶴夫 (笑って) 全然、見ないもんね、俺、顔も分からないよ。

政和 噴火の後も、ずっと東京に住み続けてますから……帰って来たのも十年くらい前が最後だこってん。

千鶴夫 そんなに？

政和 はい。その時だって、やたら派手な格好して戻ってきて、髪の毛なんか紫色で。もうみんなから総スカンだったに。

千鶴夫 そっちの家で騒いでたのは覚えてる。

政和 その格好で式典に出ようとしたんだに。

千鶴夫 それは浮くよね。

政和 ええ。それ以来、帰って来てないですに。

千鶴夫 そっか。

政和 もうね、わいにとっても兄貴だとは思えないっていうか。

千鶴夫 でも、血は繋がってるんだから。

政和 (野々宮家を見て) いや、ま、わいの家族はここにおりますに。兄さんみたいな父親が

三人、可愛い妹が二人。

千鶴夫 ……今年の式典は大掛かりなんだよ。うちの児童たちも春休み潰して歌とか踊りの練習してたから。

政和 ああ、茂さんも大変そうですね。準備でてんてこ舞いみたいで。今日も朝早くから役場に行きましたに。

千鶴夫 他のお父さんチームは？ いるの？

政和 健也さんと栄司さんは養殖場で問題あったとかで、見に行つとりますに。

千鶴夫 そっか。

政和 で、先生は？ 何しとるんですかの？

千鶴夫 天気いいなあと思って。

政和 はい。今日は多田島もはっきり見えますに。

千鶴夫 だから。

政和 ……だからって何ですか？

千鶴夫 座ってる。

政和 ああ……？

千鶴夫 どう説明したらいいんだろ？ 天気いいから、外に出てきたってだけなんだけど。

政和 はあ。

千鶴夫 窓から見て、ああ、天気いいなあと思って。で、なんか。

政和 オコジョみたいですよ。

千鶴夫 オコジョ？

政和 ほら、こういう、いや、小さい、リスみたいな……

千鶴夫 いや、もちろんオコジョはわかるんだけど。

政和 ですよね。

千鶴夫 あれって天気いいと出てくるの？

政和 おじいちゃんとかはそう言つとりましたに。

千鶴夫 (驚いて) え？ なに？ この島の話？

政和 はい。

千鶴夫 ええ？ この島にオコジョいたの？

政和 昔、ミソジマオコジョっていうのがおつたらしいですに。もう絶滅したみたいだから、それでもわいが小さい頃は時々見たつていう人もおりましたで。

千鶴夫 てことはホンドオコジョの一種だよな？

政和 え？

千鶴夫 日本にいるのつてき、エゾオコジョとホンドオコジョでしょ？

政和 そんな詳しいことは分かりませんで。

千鶴夫 けど、ホンドオコジョの一種だとしてもさ、涼しい場所に生息するんじゃないのかな、

山間部とか。

政和 ああ。

千鶴夫 この島は暖か過ぎない？

政和 んん……。

千鶴夫 その、ミソジマオコジョって、尻尾の先は黒かった？

政和 さあ。

千鶴夫 そっか。(何が面白いのか急に笑って)

政和 え？

千鶴夫 オコジョ自体、全国的に絶滅の危機だもんね。

政和 そんな、当然のように言われても……わい、そんなにオコジョに詳しくないこっぺん。

千鶴夫 なんだよそれ。政和くんが言い出したんだよ。俺のこと、オコジョみたいって。

政和 すみません。

千鶴夫 そっか。オコジョがいたのか……島に来て二十年にもなるのに、まだまだ知らないことってあるんだね。

政和 まあねえ……学校いつからですか？

千鶴夫 八日から。今年は新入生、二十五人もいるんだよ。

政和 最近、移住してくる人多いからですに。アーティストみたいな人たち。

千鶴夫 うん。

政和はふとカゴから出した洗濯物を見て、

政和 あ！

千鶴夫 どうしたの？

政和 やば……これはヤバイに。

千鶴夫 ん？

政和は女性用の派手な下着を手になっている。

政和 うわあああ……

千鶴夫 うわあ……

政和 あれ？ なんで混ざったんだろ？

千鶴夫 (笑って) やっちゃった？

政和 はい。一緒に回しちゃったみたいですよ。

千鶴夫 干しとけばいいんじゃないの？

政和 いや、二人はあっち側に、自分たちの部屋の外に干しとるこっぺん。

千鶴夫 ああ。

政和 先生、どうしたらいいかろう？

千鶴夫 部屋にそつと干しとけば？

政和 あいつらの部屋には入れないですに。

千鶴夫 謝るしかないね。

政和 めちゃくちゃ怒りますに。うわああ、まずい。これは……これはまずいこつてん。

と、寺田家の勝手口が開いて、歩羽（ふう）が顔を出す。

歩羽 （千鶴夫に）ちよつと。

千鶴夫 なに？

歩羽 ご飯済ませてよ。式典の前に学校寄るんでしょ？

千鶴夫 あ、うん。

政和 ふうちゃん、お早う。

歩羽 うん。……あれ？ 何持つとるの？

政和 いやいや、これ、間違つて混ざつとったんだに。一緒に洗っちゃったみたいで。そうだ。

ふうちゃん、これ、あいつらに返して来てくれんかのう。

歩羽 ええ？ なんでわいが？

政和 だって……わいが渡したら絶対に怒られるに。

歩羽 （家から出てきて）もう……どっちに渡すの？

政和 （下着を見て）これ、どっちのだろ？ えつと……

歩羽 そんなジロジロ見ない。

政和 いや、どつちのかなあと……。

歩羽 見たら分かるの？

政和 え？ いや、イメージで判断を。

歩羽 イヤらしい。（奪つて）かして。渡してくるから。（千鶴夫に）もうトースト完全に冷え

ちやつてるからね。カチカチだから。

千鶴夫 ああ。

歩羽 食べたたらお皿も洗つといてよ。礼服はリビングにかけといたから。

千鶴夫 わかった。

歩羽 （見ながら）これは安音ちゃんのだね、きつと。

と、歩羽は家の中に入っていく。

政和 へえ……。

政和千鶴夫を見て、

政和 ……先生のところは一緒ですかの？

千鶴夫 何が？

政和 洗濯。ふうちゃんのも先生のも一緒に洗つとります？

千鶴夫 うん。

政和 そつか……関係あるんですかの？

千鶴夫 何が？

政和 ほら、先生のところは養子縁組をちゃんとしとるじゃないですか。

千鶴夫 ああ。

政和 うちはそのままだから、だから、こう、家族的なつながりが弱いんですかの？

千鶴夫 (笑って) 弱くないでしょう？ 仲良く見えてるよ、こっちからは。

政和 ああ。

千鶴夫 じゃなかったらいつまでも六人で住んでないでしょ？

政和 まあ、そりゃ。ですのう。

千鶴夫 みんな大人なのに。そんな狭いところに。

政和 まあ。

千鶴夫 それにさ、血が繋がってても年頃になると嫌がったりするっていうじゃない。

政和 ええ。(冷やかすように) 先生のところは特別ですから。

千鶴夫 え？

政和 いや、なんていうか、二人の距離。

千鶴夫 距離？

政和 みんな言つとりますに。

千鶴夫 なにが？

政和 親子っていうより、夫婦みたいだって。

千鶴夫 はあ？ なにそれ？

政和 去年だつて……ふうちゃん、すごかったですに。

千鶴夫 ん？

政和 ほら、夏に牧子さんっていう人、しばらく滞在しとったに。

千鶴夫 ああ、うちにね。

政和 ええ。あの人おる間、ずっと機嫌悪かったですに。あれ完全にヤキモチだこつてん。

千鶴夫 そんな訳ないでしょ？

政和 あれは絶対にそうですに。

千鶴夫 だいたい、牧子ちゃんはそういうのじゃないし。陽子の妹だから。あ、陽子、俺の、

死んだ妻ね。

政和 ああ、え？ あ、いや、そっか。
千鶴夫 何？

政和 一瞬、混乱しちゃって。そうですね。その陽子さん亡くなったのは噴火でじゃなかったですもんね？

千鶴夫 ああ、病気で。俺が島に来る前の話だから。

政和 いや、かなり人亡くなってるから、ややこしいでしょう。

と、歩羽が戻って出て来て、

歩羽 なんでまだいるの？

千鶴夫 ああ。

政和 え？ 渡してくれたかの？

歩羽 うん、台所に明那ちゃんいたから。

政和 明那のだったのか。

歩羽 知らない。

政和 怒った？

歩羽 さあ。なんか忙しそうだったから。(千鶴夫に) ほら、ご飯！ もう、ゴミまでつけて。
(と、千鶴夫の背中を払う)

千鶴夫は少し避ける。

歩羽 (笑って) なんで避けるの？

千鶴夫 (政和に) じゃ、式典で。

政和 はい。

と、千鶴夫と歩羽は勝手口から家の中に入っていく。

政和 ……。

政和はカゴから新たな洗濯物を出して、

政和 ええええ？ 嘘？

またしても女性物の下着。

政和 ヤバイよ……うわ……これはどっちのだ？

と、マジマジと見る。さらに洗濯カゴからブラジャーなどを出して、

政和 あれ？……嘘？

遠くからチャイムの音。島内アナウンスだ。それはたどたどしい。

『本日、十時より、つい、追悼公園内、とうみん、島民集会センターにおきまして、追悼式典が行われます』

政和はテラスから駆け下り、寺田家の勝手口をノックする。

政和 ふうちゃん。ふうちゃん！ もう一回お願いがあるに。ふうちゃん！

野々宮家の引き戸が開いて明那が出てくる。

手にはさっきの下着を握っている。

明那 政和。

政和 わ！なんだ？（驚いて下着を後ろポケットに隠し）急に声かけたらどっかりするだろ。

明那 そこで何しとるの？

政和 いや……。

明那 オマア、いい加減にするに。ちゃんと洗濯機の中確認して。

政和 ごめんごめん。知らずに回しちゃったみたいだに。……それどっちの？ オマアの？ 安

音の？

明那 知ってどうするの？

政和 うん……いや、傾向を知っておきたくての。

と、勝手口が開いて、歩羽が顔を出す。

歩羽 ……何？

政和 （困って）あ、いや、あの……

歩羽 （笑って明那に）なに？ 説教の時間？

明那 （かすかに笑って）まあねえ。

明那 政和。

政和 （後ずさって）おおお……。

明那 見とらんよね？

政和 何が？

明那 安音。

政和 まだ寝とるんじゃないの？

明那 ……おらんに。

政和 は？

明那 探してもどこにもおらんに。

政和 ああ……。

明那 いつ出たってたんだろ？

歩羽 (政和に) え？ あの、わいはこれ……なに？

政和 え？

歩羽 ノックしたでしょ？ わいを呼んどったよね？

政和 あ、うん……。

歩羽 なによ？

政和 いやあ、それは……

歩羽 え？

明那 歩羽ちゃんも見とらんもんね？

歩羽 安音ちゃん？ うん。ずっと家におったし。あ、電話してみたなら？

明那 あの子、電話、部屋に置いてつとるに。

政和 だったらその辺、ぶらぶらしとるだけじゃないの。

明那 こんな朝に？

政和 別にそんな心配するようなことじゃないに。

明那 けど、今日だこってん。四月二日だに。

政和 ああ……。

明那 ……ここ二、三日、様子おかしかったもん。

政和 ええ？ 陽気だっただろ？

明那 妙にね。

歩羽 そういえば、安音ちゃん、一昨年だっけ？ あの時もいなくなったもんね？

明那 そう。同じ日。

歩羽 やっぱり節目には考えちゃうのかな。

明那 うん。

歩羽 いや、考えるよね。わいも……昨日の夜とか、思い出しちゃってどうしようもなかった

に。(自分の家を指し) 思わずアレ、起こしちやっただこってん。

明那 え？

歩羽 いや、アレ。

政和 (驚いて) え? 先生を?

歩羽 うん。気持ちが子供に戻っちゃって。(笑って) 一緒の部屋で寝ていいって聞いたら断られたけど。

明那 そりゃ、まあ、そうだに。

明那と政和は一瞬目を合わす。

歩羽 ごめん、安音ちゃん。(のことだよね)

明那 うん。

政和 (笑って) けどあいつももう三十歳だに。

明那 万が一ってことあるでしょ? あの時は絶対に死のうとしとったんだに。

政和 いや、違うって。

明那 そうだに。

政和 普通に帰って来たじゃないの。

明那 だけど、遺書みたいなもの置いとったこってん。

政和 え? 嘘? 今日も?

明那 いや、今日は……それらしいものはなかったけど。

歩羽 お父さんチームには?

明那 ああ。シゲには電話したけど今は手が離せないみたいで。健ちゃんと栄司さんにはつながらないに。あの二人、肝心な時はいつも連絡取れないこってん、本当に……。

歩羽 養殖場?

明那 そう。政和、ちょっと行ってきてよ。

政和 え?

明那 二人に知らせて来て欲しいに。

政和 ええ? けど、洗濯物がまだ……

明那 そんなのいいから。

政和 わかった。

歩羽 (勝手口のドアを開けて家の中に) ねえ! 安音ちゃん見てないよね?

と、政和は自分の家に戻ろうとする。

明那 どこ行くの?

政和 玄関から。

歩羽 (家の中に) 安音ちゃんよ!

明那 そのまま行けって。

政和買ったばかりのスニーカー履いて行くに。その方が早いこつてん。早いかな？ 早いよ。

と、政和は中に。

勝手口からは食パンをくわえ、コーヒーを手にした千鶴夫が出てきて、

千鶴夫 ん？

歩羽 ……（笑って）なにそれ？ ラブコメじゃないんだから。

千鶴夫 （パンをとって）なにが？

歩羽 食パンくわえて。転校生にでもぶつかるともり？

千鶴夫 どういう意味？ 転校生？ ぶつかると何？

歩羽 いいわよ。

千鶴夫 安音ちゃんが何？

歩羽 見てない？

千鶴夫 俺が？

歩羽 ここでぼうつとしてたでしょ？

千鶴夫 え？ なに？ （明那）いないの？

明那 そうなんですに。

千鶴夫 いやあ、見てない……あの子、前も……。

明那 そう。だから心配で。

千鶴夫 うん……。

歩羽 あの時はどこで見つかったんだっけ？

千鶴夫 いや、あの時は……ねえ？

明那 はい。

千鶴夫 あれだよ。家のあった場所に行ってたんだよ。

歩羽 ああ。

と、上手前から政和が出てくる。下着が入ったポケットを手で押さえている。

明那 あ、ねえ、二人に知らせたらさ、安音の家も見えて来て。

政和 安音の家？

明那 小さい時の。

政和 （笑って）ああ、わいの家のあったとこな。

明那 うん、いや……

政和 安音の家とは隣だったのう。

明那 それ一々言う？

政和 歩羽ちゃんに言っただけだに。

歩羽 百回以上聞いたとる。

政和 ああ。けど、あんなとこまで行っとなら、わい、式典に出るのに間に合わなくなっちゃうに。

明那 戻ってきたらすぐ連絡するに。安音見つけたらオママもすぐ電話して。

政和 うん。

と、政和は下手に消える。

歩羽 どこ行っちゃったんだろうねえ。

明那はテラスから出てきて、

明那 わいもちよっただけ見てくるわ。その辺りを。

歩羽 一緒に行こうか？

明那 いいいい。でも安音が戻ってきたら教えて。

歩羽 え？

明那 そこ見てくるだけだからすぐ戻る。

歩羽 ああ。

と、明那は石段を上がって行く。

明那 先生もすみません。

千鶴夫 そんな。

千鶴夫 ……どうする？

歩羽 何が？

千鶴夫 戻ってきたら教えてって。

歩羽 ああ。

千鶴夫 俺たち家の中に入れてないよ。

歩羽 え？ 仕方ないでしょ？ じゃ私、いるから。ほら、皿洗っついて。

千鶴夫 うん……。

しかし千鶴夫は動かず、

千鶴夫 いや、心配だよなあ。

歩羽 え？

千鶴夫 安音ちゃん、繊細だから。小さい時からそうだったもん。

歩羽 ああ……。

千鶴夫 ……噴火で両親亡くしてからは完全に閉ざしちゃったっていうか。小学生なのに目が、諦めた大人のそれっていう感じで。

歩羽 今はよく笑ってるよ。

千鶴夫 でも、あの目は忘れられないな。ギョツとしたもん、なんか。(笑って) 変な意味じゃないけど、大人の女性だった。

歩羽 やめてよ、そんな気持ち悪いこというの。

千鶴夫 だから変な意味じゃないよ。

歩羽 逆に変な意味ってなによ？

千鶴夫 いやいや……。子供なのに、大人みたいだったって話。

歩羽 そう言えばいいでしょ？

千鶴夫 言ったよ。

歩羽 大人の女性って言ったから。

千鶴夫 女性だろ？

歩羽 いちいち、女性をつける必要ないでしょ。

千鶴夫 ああ。

歩羽 やめてよ、そういうの。

千鶴夫 ええ？ 何を怒ってるの。

歩羽 なんか、嫌なの、そういう言い方。

千鶴夫 ああ。……あれ？ 中で音してない？ 帰って来たかな。

と、野々宮家を覗き込む。

歩羽 私、見てくるから。ほら、済ましちゃって。そろそろ出ないとダメなんじゃない？
千鶴夫 うん。

歩羽 入りまーす。

と、歩羽は野々宮家の中に、

千鶴夫 ……。

スーツ姿の男(野々宮陸郎)が石段から現れる。手にはスニーカー。

千鶴夫と男はぶつかる。

千鶴夫 あ、すみません。

陸郎 すみません。いや……道に迷って、こっちは……あ、そっか。

千鶴夫 え？ どちらに？

陸郎 大丈夫です。

と、男は下手へ消えていく。

千鶴夫 ……こんなところに……誰だ？

千鶴夫は首を傾げてから、家の中に戻る。

入れ替わるようにテラスには歩羽、続いて健也と栄司が出てくる。

健也と栄司は作業着姿。

栄司 本当におらんの？

歩羽 そうみたいです……。

健也 いやあ、まさかなあ。去年は大丈夫だったで油断したこってん。

栄司 うん。

歩羽はテラスから降り、自分の家の方に。

歩羽 政和君が走って見に行ったりします。

栄司 どこをだ？

歩羽 ……昔の家、いや、家のあったところを。

栄司 あ、二年前もあそこにおったでの。

健也 うん……昨日も元気だったから、すっかり安心しとったに。

栄司 わいは気になっとったけどの。

健也 は？

栄司 あれは空元気がないかと、読んどったでの。

健也 そう。

栄司 だから方が一を考えて、寝る前に安音に声はかけたこってん。

健也 なんて？

栄司 「あんまり昔を振り返るなよ」って。

健也 はあ？

栄司 いや、言っというてやるに越したことはないと思っでの。

健也 やめるよ。なんだそれ？ 振り返るなよって……なんだそれ？

栄司 何が？

健也 そういうな、適当なこと言うなよ。

栄司 どこが悪いんだよ？

健也 気にするだろ？ 振り返るなって言われたら、余計思い出しちゃうだろ？ しかも……

昔を振り返るなって、薄っぺらすぎるんだよ、オマアの言葉は。

栄司 はあ？

健也 あのな、わいはな、わいなりに、色々考えとるに。これでも父親代わりとしてあいつら

のことを考えとることてん。

栄司 わいだって父親だでの。

健也 オマアは違うに。

栄司 それならオマアも違うだろ。

健也 わいはそうだって。

歩羽 ちょっと、二人ともやめてくださいよ。

健也 ……ああ。

栄司 だいたい、明那はなんですかに知らせんのだ？

歩羽 二人は連絡がつかないって。

二人 え？

二人揃って携帯を出す。

二人 (画面を見て) あ。

健也 明那から三回も電話かかっとるに。

栄司 え？ 嘘？ わい、一回だけだ。

健也 ああ。

栄司 何時になっとる？

健也 は？

栄司 着信。

健也 はあ？ なんだそれ？

栄司 何時？

健也 八時二十分、二十一分、で……二十八分。

栄司 わいは……二十三分。一回だけ。ええ？

歩羽 どうしたんですか？

栄司 くそ。なんかあったら真っ先にわいに言えっつっていつとるのに。

歩羽 だから電話したんです、明那ちゃんは。

栄司 いや、けどな、着信の時間から推測するとだな。健也にかけて出ない。もう一度健也か
けたけど出ない。だから仕方なくわいに一回電話した。で、最後にやっぱり健也に電話。こ

のパターンだに。

歩羽 それがなんなんですか？

栄司 この家におけるわいの重要度の問題。

健也 今、そんなこといいだろ？ 安音のこと心配しろよ。

栄司 しとるよ。(歩羽に) 茂にはかけたって？

歩羽 そう言ってました。

栄司 何時に？

歩羽 は？

栄司 着信の時間聞かないと。

健也 だから黙ってるよ、オマアは。

と、石段から明那が現れる。

明那 あれ？

健也・栄司 おお！

健也 明那。

明那 ああ……え？ もう？ 政和から聞いて戻って来たの？

健也 いや……帰ってきたら、ふうちゃんが知らせてくれたの。おったか？

明那 (首を振って) ううん。

健也 そっか……。

栄司 わいにすぐに電話しろよ。

明那 したけど出んかったに。

栄司 健也に三回もかけとるからだこってん。わいだったら三回かかったら出たに。

健也 (無視して) いつ？ いつからおらの？

明那 いや、気がついた時には。

健也 オマア、家におったんだろ？

明那 うん。

健也 何しとったんだ？

明那 わい？ わいは台所片付けとって、政和は洗濯しとって……。 (歩羽に) あ、もういいよ。
ありがとう。

歩羽 あ、うん。なんかあつたら言っつてな。

明那 わかった。

栄司 ふうちゃん、ごめんね。

歩羽 いえいえ。

と、歩羽は勝手口から家に戻っていく。

明那が無意識でさっきの下着で顔などを拭いている。

栄司 (明那に) ああ、安音は二年前にああいうことあったこつてん、オマアもちゃんと気にかけとかんと。

明那 わい？

栄司 そう。オマアと安音は双子みたいなもんだろ？

明那 そりゃそうだこつてん。

栄司 だから、ちゃんとしとかないかんに。

明那 はあ？

健也 うん、確かになあ。

明那 待って。健ちゃんまでそういうこと言う？

健也 何が？

明那 これ、今、わいが責められとる訳？

健也 いや、責めてはないに。

明那 なんか二人とも、完全にそういう空気だに。言っとくけど、わいは忙しいに。家のことも全部やつとるに。

栄司 台所の片付けしとただけだろ？ 安音がおるかどうかくらい見とつたらわかるこつてん。

明那 …… (薄ら笑いで) ああ、わい、朝ごはん作つて。片付けもして。家の掃除もして。

それから式典の為にオマアらの服も出して、シャツにアイロンかけて。

健也 それは、うん。

明那 全部、全部、わいがやつとるに。安音のことだつて、わいは誰よりも気をつかつとるこつてん！

健也 そうだな。悪かったに。

明那 悪かったつて……なに、その軽い感じ。

健也 あ、うん。

栄司 (明那が持っている下着に気がつき) 明那？

明那 なに？

栄司 オマアはなんで？

明那 は？

栄司 いや、いいけど。

明那 こんなところで話しとつても埒があかんに。ちょっと、わい、ビンドラッグ見てくるわ。

あの子、よく行くし。

健也 自転車でか？

明那 歩いて。

健也 自転車は？

明那 パンク。

健也 ああ。歩くと結構あるぞ。

明那 いい。

と、明那は上手に消える。

栄司 ……あいつ、なんで？

健也 は？

栄司 いや、ハンカチかと思ったけど、よく見たらあいつパンツ握りめとったに。

健也 え？

栄司 パンツ。派手なパンツ。

健也 それは……それだけ動揺しとるこってん。

栄司 動揺したらパンツ握るか？

健也 わいは、時々あるで。

と、石段から礼服を来た茂が降りてくる。

腕には「実行委員」と書かれた腕章。

茂 おお！ ……安音、おったか？

栄司 オマア、なんだ？ 式典の準備はいいのか？

茂 よくないけど、明那から電話もらったの。だから抜けてきた。おったのか？

健也 まだ……。政和が南側探しとるらしい。今、明那はビードラッグ見に行つとる。

茂 そつか……。

栄司 茂、オマアは何時に電話もらった？

茂 え？

栄司 明那から。

茂 さっきだに。二十分くらい前か。

栄司 違うに。正確な着信時間。

茂 はあ？

栄司 何分？

茂 そんなこと覚えてないに。

栄司 確認したらいいでないか？

健也 おい、そんなことどうでもいいだろ？

栄司 一応な。

茂 え？（携帯を出して時間を見て）八時二十……二分。

栄司 うわ……明那、わいの前に茂にかけとるこってん。

茂 何を言つとるに？

栄司 ちよつとこれからの行動を考えないかん。

茂 はあ？

健也 ……とにかく、わいらも手分けして探すか？

茂 でもさ、探すつてどこを？

健也 あいつの行きそうな場所はどこだ？

茂 あ、でももう警察には捜索頼んだに。

健也 え？ まだ早いだろ？

茂 ちよつと巡査がおったから。万が一があるこってん。

健也 万が一ってなんだ？

茂 だって安音、一昨年だって、遺書みたいな手紙書いて。

健也 そういうこと言うなつて。

茂 念には念を入れた方がいいだろ？

健也 大げさにしたら、逆に戻って来つらいだろ？

栄司 それはある。茂、勇み足だに。

茂 なんだ、オマア、ちよつと黙つてろ。

栄司 はあ？

茂 とにかく急いでくれ。式典は十時からだに。

栄司 えらそうに言うな。

健也 けど、安音が見つかるまでは無理だこってん。

茂 無理つて……式典に出ないなんてあり得ないに。

健也 無理なもんは無理だに。

茂 はあ？

健也 だいたい、安音に万が一のことがあったらつて言ったのはオマアでないか。

茂 だけど、わいの役場での立場もあるでう。

栄司 （笑つて）そんなことは関係ないわ。（健也に）なあ？

茂 おい、なんだそれ？ いいか？ 二十年目の大事な節目だろ？ この島の人間にとつて、

一番大切なことだこつてん。

栄司 もっともらしく語るな。そんなに大切な式典ならな、ちゃんと噴火の時刻に合わせて夕

方にやれ。

茂 それだと夜までかかるこつてん。子供たちだつて参加しづらいに。

栄司 違うでないか。十年前、政府から偉い人が参列するからつて、オマアら役場の人間が時

間ずらしたただけだろ？ 全然島の人間のことなんて考えとらんでないか。

茂 だから夕方は各家庭でやってもらってだな……。

栄司 言い訳するな。だいたい、オマア、一回外に出た人間でないか。あの噴火も経験したらんくせに上から物を言うな。

茂 は？ ニュースで知ってすぐ戻って来たに。

栄司 随分経ってからな。

茂 船が出とらんかったに。

健也 おい、いつの話をしとるに。

栄司 (茂に顔を近づけ) とにかく役場勤めかなんか知らんけど、わいらに命令するなって言っとるに。

茂 おい、なんだ、オマア。

と、思わず栄司を押し。

栄司 ちょ、なにするんだ？ (と、小突き返す)

健也 オマアら、やめとけ。

茂はビビりながら、

茂 ……だいたい、わい、栄司と一緒に住むのはうんざりだに。

栄司 だったら出てけよ。

茂 オマアが出てけ。

栄司 それはこっちのセリフだわ。

茂 許せんこと多すぎるに。オマア、昨日もわいの歯ブラシ使っただろ？

栄司 知らん。

茂 毛の部分が濡れとったに。口に入れて「あ」っと思ったわ。

栄司 ほうほう。それがわいだっていう証拠あるんか？

健也 おい、そんな方向に進んでいくな。

茂 だけど歯ブラシはおかしいに。

健也 まあな。栄司も人の歯ブラシはダメだに。

栄司 間違えたただけだろ？ 色が一緒だに。

健也 形が全然違うだろ？ オマアのはグニヤツと途中で曲がっとるだろ？

茂 そうそう！

健也 ちゃんと見てだな。

栄司 (健也に) けど、そんなこと言うなら、オマア、小学校の時わいのリコーダー使っ

ただろ？

健也 ちよっと借りただけだに。それにどこまで時間戻すんだ。

茂 どこまで時間戻すんだ。(栄司の肩に手を置く)

栄司 (茂に) オマア、入ってくるな！

と、肘で茂を突く。

茂 (苦しそうに胸を押さえて) 手、出すなよ！

栄司 さっきオマアもやったでないか！

それをきっかけにつかみ合いになる。

栄司・茂 おおお！

健也 おい！

健也は止めに入る。

健也 やめんか！お前ら小学生のままか！

と、引き戸が開いて安音が顔を出す。

三人はそれに気づくと、喧嘩をやめ、スローモーションのように一列に並ぶ。

安音 (静かに) ……何しとるの？

三人 ……(声のトーンまで揃って) おう、やすね……。

安音 どうしたの？

健也 どうした、とは？

安音 知らないけど、朝から大人がじゃれ合って。

栄司 お、おま、オマア……な、なんで？

安音 何でって？

健也 あの、ん？ どこに？

安音 はあ？

健也 どこか、出かけとったのか？

安音 別にいいでしょ。

健也 いいけど……どこに？

安音は一瞬考えて、

安音 ……ビーンドラッグ。

三人は顔を見合わせ、

三人 おおおお。

栄司 それならいいわ。

茂 ま、そうだな。薬局行くことはあるもんな。

栄司 あそこは朝早くから開いとるで便利だに。わいの歯ブラシもあそこで買ったに。

茂 (笑って) だけど、安音、それちゃんと伝えてから行けよ。

安音 は？ なんで？ 薬局行くのにいちいち言うの？

茂 そうだけど……ほら……

健也 明那には？ 会ってない？

安音 うん。

健也 そつか。あいつもビーン行つとると思うんだけど。

安音 へえ。

栄司 オマアが見当たらんって、ちょっとな。

安音 え？ わいを探しに行ったの？

栄司 オマア、あのな……

健也 (制して) いいって。

栄司 ……安音、あの、ほら、気分はどうだ？

安音 どうして？

栄司 ほら、今日は……だろ？

安音は察して微かに笑い、

安音 ……そういうことね。わいが死ぬんじゃないかって？

三人 いやいや。

安音 やめて欲しいんだよね。腫れ物に触るみたいに扱うの。

健也 心配したただけだろ？

安音 親の振りはいいつて。

三人 ……。

安音 ほら、出かける準備したら？

健也 だな。

栄司 うん……。

茂 わい、戻るで。

健也 (小さい声で) お巡りに……。

茂 言つとく。じゃ、安音も会場でな。

茂は石段に消えていく。

安音、健也、栄司は家の中に入っていく。

そつと下手から陸郎が出てくる。

何かを探している。

陸郎がキーホルダーを拾い上げ……。

暗転

第二場

その日の夕方。

千鶴夫が礼服の上着だけ脱いだ状態で、道にレジャーシートを敷いている。勝手口から歩羽が小さなテーブルを出して来る。アンティーク風の小洒落たもの。

歩羽 はいこれ。

千鶴夫 こんなテーブル出すの？

歩羽 可愛い方がいいでしょ。あ、イスだよね。

と、家の中に引っ込む。

千鶴夫 だけどこれ、お斎(とき)みたいなもんなんだぞ。

歩羽 (イスを持って出てきて) おトキってなに？(イスを渡す)

千鶴夫 (受け取って) ほら、お寺とかで法事の後に食事するだろ？ ああいうやつ。

歩羽 そんなにこだわることはないって。去年なんて最後はただのカラオケ大会だったじゃない。(と、引っ込む)

千鶴夫 けど、一応、二十年前の噴火で亡くなった皆を偲ぶための食事なんだから。

歩羽 (もうひとつイスを持って出てきて) いいから、ほら。

千鶴夫 (イスを置きながら) 隣とあんまり落差があるのはまずくない？

歩羽 大丈夫よ。後はグラスとか食器だよね？

千鶴夫 料理はなに？

歩羽 さあ。隣がまとめて注文してくれてるから。

千鶴夫 そっか。

歩羽 あ！ お皿あれ出そっか？ 去年、静岡に行ったときに買ったやつ。

千鶴夫 え？ 本気？

野々村家の引き戸が開いて、礼服姿の明那が出てきて、一人で大きな作業台を外に出
そうとしている。

歩羽 うん！ だって使う時ないもん。

と、嬉しそうに歩羽は家の中に。

明那 あ、ご苦労さまです。

千鶴夫 ああ。(勝手口に) おい、あんなの出したらおかしいって。恥ずかしいよ。

明那は苦労している最中。

明那 ちくしよ、よつと。くそー！

千鶴夫 (明那に) え？ 一人でやってるの？

明那 お父さんチームは料理やお酒を取りに行つて。(家の中に) 安音！ 手伝って！

千鶴夫 あ、俺、手伝うよ。

明那 すみません。

千鶴夫 じゃ、失礼して。

と、千鶴夫はテラスに上がってきて、

千鶴夫 だけど政和くんは？

明那 籠城してますに。

千鶴夫 籠城？

明那 なんか珍しく怒っちゃつて。絶対に部屋からは出てこないって宣言して。

千鶴夫 どうして？

明那 朝、安音がいたってわかった時、わい連絡するの忘れちゃったに。

千鶴夫 あ、それで彼、式典に遅れて来たのか？

明那 はい。しかも警察に尋問受けてみたいで。

千鶴夫 ええ？

明那 下着泥棒と間違えられて。わいらの洗濯物を持ってたに。

千鶴夫 ああ……。

明那 ま、ほつといたら自分から出てくるに。政和は怒りを持続させることできん質だこつてん。(千鶴夫に合図して) じゃ……。

二人は作業台を持ち上げる。

千鶴夫 ……え？ これはなに？

明那 テーブルにしようと思って。養殖場で使った作業台だに。

千鶴夫 ああ……どこに置くの？

明那 適当でいいと思いますけど。じゃ、ここで。

二人 しょっと。

二人は作業台を適当な場所に置く。

千鶴夫 え？ これで食事するんだよね？

明那 ダメですか？

千鶴夫 ……。

明那 なんか、布とかかけますに。

安音が出てくる。スエット姿。

安音 なに？

明那 手伝ってよ。え？ オマア、着替えちゃったの？

安音 だって楽だもん。

明那 けど、黙禱とかするに。

安音 式典でしたじゃん。

千鶴夫 あ、じゃ。

明那 ありがとうございます。

千鶴夫は戻って行く。

安音 手伝うって何するの？

明那 これに布をかけて、取り皿とかグラスとか出すんだけど……。

寺田家から歩羽が出てくる。

かわいいテーブルクロス、皿セット、カトラリーなどを持って出てくる。

千鶴夫 それ、本当に？

歩羽 いいでしょ？

歩羽は楽しそうにテーブルにクロスをかける。

明那 食器取ってきて。

安音 わい、わかんない。

明那 じゃ、なんか布探してここに掛けて。

安音 わかった。

明那は入っていく。

しかし安音は動こうとせず、歩羽のテーブルを見ている。

歩羽 あ、あれも持ってきて。

千鶴夫 あれ？

歩羽 これと一緒に買ったやつ。

千鶴夫 嘘だろ？

歩羽 いいから！ ほら！

千鶴夫 どこにある？

歩羽 私の部屋のね、ベッドサイドに。

千鶴夫 ああ。

千鶴夫は入って行く。

歩羽は、洋食器のセット二組、巻いてあるナフキン、スプーン、フォークなどを並べている。

安音 なんかすごいね？

歩羽 去年、これ、セットで買ったんだけど使う時なくて。

安音 ああ……。

歩羽 一回だけ使ってみたんだけど、もうおかしい感じになっちゃって。

安音 お父さんと娘がそれで夕食って、かなり不条理な光景だもんね。

歩羽 そう。しかもメニュー、普通の和食だったし。

安音 そうなの？

歩羽 これに冷奴とかキンピラ入れて。ものすごく食べにくかったに。

安音 キンピラは箸でないよ。

歩羽 (自分の家を指して) アレ、ナイフで冷奴を切って、スプーンで味噌汁飲んでたもん。

安音 ……歩羽ちゃんさ、先生のことどうして「アレ」って呼ぶの？

歩羽 え？

安音 だって養子縁組してる訳だからさ。

歩羽 父親って雰囲気でもないこってん。友達みたいな感じだし。

安音 ああ。

歩羽 小さい時は先生って呼んどったけど、担任だったし。

安音 うんうん。

明那が食器を持って出てきて、

明那 (千鶴夫家のテーブルを見て) うわあ、すごいね？ 可愛い。

歩羽 でしょ？

明那 (持ってきた食器を眺め) どうしよう？ うち、バラバラだに。

安音 これなんか、なに？ 子供用じゃん。土偶のGOO太郎ついてるし。

明那 こういう時の為に……うちもなんかセットで買おうかな。

千鶴夫 (出てきて) これのことか？

千鶴夫は豪華な燭台をそっと歩羽に渡す。

歩羽 そうそう。……(テーブルに置く) よしと。

明那と安音は驚いている。

明那 うわ、まるで貴族のディナーだこってん。

千鶴夫 おい、相当恥ずかしいよ、これは。

歩羽 そんなことないって。(明那に) もう始めるよね？

明那 うん……サイレン鳴るの五時十五分だから、それまでに揃ってるようにしよ。

歩羽 わかった。じゃ、後で。

安音 うん。

歩羽 (千鶴夫に) 後はグラス選ばないと。ほらほらほら。

と、歩羽は千鶴夫の背中を押しながら楽しそうに勝手口の中に。

千鶴夫 押すなって。

歩羽 ふふふふ。

勝手口のドアが閉まる。

安音 (笑って) おかしいよね、あの父娘。

明那 そう？

安音 まるでカップルだもん。

明那 仲良いだけだに。

安音 ええええ？ 明那も変だってこの前言ってたじゃん。

明那 ……で、布は？

安音 布？ ああ、まだ持ってきてない。

明那は干してある洗濯物を取り入れようと、洗濯カゴを取りに行く。

明那 先に敷いとかんと。テーブルクロスあるに。

安音 どこに？

明那 自分で探して。

安音 面倒くさい。

明那 安音……お願い。少しは手伝ってくれてもいいに？

安音 だって、わい……こんなのしたくないもん。

明那 は？

安音 どうせお酒飲んで騒ぐだけだに。

明那は洗濯物をカゴに入れていきながら、

明那 大事な時間だに。どこの家でも、亡くなった人のことを思い出しながら、いろんなこと話して。

安音 うちはないでしょ？

明那 どうして？

安音 家族じゃないこってん。

明那 ……家族だに。

安音 (笑って) 他人の集まりだでのう。

明那 (作業の手を止めて) 安音……。

安音 明那はみんなに可愛がってもらってるから違うんだろうけど、わい、どうしたってそんな風には思えんに。

明那 オマア、何言っとるに。安音の方が可愛がられとるこってん。わい、逆に嫉妬するもん。

安音 冗談言わんでよ。

明那 本当だに。

安音 (鼻で笑って) いやいや。

明那 朝だって、みんな、どんだけ安音のこと心配しとったと思う？ 栄司さんなんてわいに

怒って。

安音 だから明那には言えるんでしょ？

明那 そういうことじゃないに。わいよりオマアが可愛いんだに。

安音 そう言える余裕にムカつくわ。

明那 は？

安音 どんな風に言ってくれても、わいの家族は、二十年前に死んじゃったお父さんとお母さんだけに。

明那 ……。

安音 あの三人はわいのお父さんじゃないし、あの下着泥棒もお兄ちゃんじゃないし、あ、そうだ。明那のことだって姉妹だと思ったことなんて一度もないこってん。

明那 ……。

安音 (笑ってテーブルの上に座り) だからわい、毎年不愉快だに、この日が。他人からさ、亡くなったわいの親のこと偲んでもらう筋合いないに。

明那は途端に気遣いする気が失せて、

明那 ……そ。じゃ、いいよ。準備は全部わいがやるに。

安音 は？

明那 (残りの洗濯物を外しながら) オマアは知らんけど、わいは感謝しとるに。あの三人には心の底から感謝しとるに。……栄司さんも自分の妻亡くしとるし、健ちゃんなんて息子まで失つとる。(テーブルに座っている安音に) そこ座らんで！……シゲだって夢だった絵を諦めて島に戻って……他人のわいらを育ててくれて。普通は感謝するに。

安音 ……。

明那 オマアは家のことだって何にもやらんし。あんな、自分が歩み寄らんから家族だと思えんのだに。

安音 ……わかった、やるよ。

明那 いい！

安音 布持ってきたらいいんでしょう？

明那 それもわいがやる！ 全部わいがやる！

引き戸が開いて政和が飛び出てくる。

政和 おい！ 明那。

明那 なに！

政和 (怯んで) え？ いや……オマア、ひどいだろ？ わい、怒って部屋に籠っとるのに。

ほら、呼びに来て謝るとか。

明那 は？

政和 わい、部屋から出て来れんだろ？

明那 出てきとるでないか。

政和 うん。

明那 電話せんかったことは謝ったに。だいたい、オマアが下着を持ったままウロウロしとるのが悪いこつてん！

と、明那は苛立って家に入って行く。

政和 ……あれ？ 明那、なんか怒っとる？

安音 うん。

政和 わい、なんかしたかのう？

安音 いや……わいが怒らせたに。

政和 どうして？

安音 うん、ちよつとだけ言い合いして。

政和 (笑って) ま、あいつはすぐに怒るでう。

安音 いや、わいが悪いんだけどね。

政和 ……。

政和は安音を見つめ、開いていた引き戸を閉めて、

政和 けど、どんなことあっても……わいは……わいは安音の味方だに。

安音 え？

政和 なんといいっても隣同士だったでの。

安音 ああ……。

政和 小さい時は、いつもわいと兄貴について回って。

安音 遊んでもらったのは覚えとる。相撲とか。

政和 おう。……今日、ちよつと感動したに。パンツ、すっかり大人のやつだったでう。

安音 はあ？

政和 うん。

安音 最低。オマア、本当に下着泥棒？

政和 違うに！……わい、忘れられんのでう。わいが五歳の時だったと思うけど、おばちゃんが赤ちゃんを抱いて病院から戻ってきた時のこと。「安音ちゃんって言うのよ」って。

安音 ……。

政和 あの子があんなパンツを履くようになったと感動したこってん。

安音 バカじゃないの。

政和 とにかく、わい、ずっと安音の味方だに。

安音は考えてから、

安音 ……あの、わい……。

政和 どうした？

安音 ちよつとみんなに黙つとることあつて。

政和 え？

安音 それで悩んどるんだけど。

政和 なんだ？ わいでよかったら力になるで。

安音 うん……。

政和 なんでも聞くに。(ふざけてシコを踏みながら近づく) どすこいどすこい、どすこい、どすこい、どすこい。

安音は立ち上がって、

安音 あのね、わい……

政和 おう。

見つめ合う二人。下を向く安音。再び顔を上げる。

安音はそつと政和の腕を取る。

政和 え？……ええ？

政和は動揺する。

政和 あ、ええ？……（家の方を窺ってから）あ、あの……オマアが口に出す前に一応言っとくと、わいら家族だに。

安音 ……ああ。

政和 もちろん、それを越えることは出来る……と思う。

礼服姿の健也と栄司がビールケースを抱えて下手から出てくる。

健也 おう！ オマアら準備は？

政和 あ、いや……。

安音 ご苦労様。

健也 これビール。何本かそこに出して、後は冷やしといてくれ。

栄司、健也がそれぞれビールケースを政和に渡す。

政和 はいはい。

栄司 安音、オマア、格好。

安音 すぐ着替えるに。

政和 （受け取って）あれ？ こっちのケースはえらい軽いに。

健也 まあな。

政和 あ！ 飲んどる！

健也 三本づつな。

政和 もう！

栄司は寺田家のテーブルを見て、

栄司 ん？ なんだこれ？ えらいことになつとるこつてん。

健也 茂は？

政和 まだ戻って来とらんと思うけど。

健也 もうすぐ十五分だに。おい、イス出しとけ。ほら、栄司も。

栄司 うん。やば、あのイス……。

と、二人は上手に消える。

政和は二人がいなくなったのを確かめてから、

政和 え？ 話は？

安音 うん、いい。時間ないし。

政和 けど……。

安音 ありがとう。わい、着替えるわ。

明那がカーテンを持って出てきて、

明那 テーブルクロス見とらんよね？

政和 ああ……。

安音 (家に入っていく) 明那、ごめんね。

明那 え？

隣からも可愛いグラスを持った歩羽が出て来る。

明那 ん？ あの子、どうした？ (布の端を渡して) これ敷いて。

政和 え？ これ、カーテンだろ？ しかも破れとるぞ。

明那 これしかないに。ほらほら、大きさもちょうどいいに。

と、台の上にカーテンをかけて、そこに食器を並べる。

政和はビールを並べ、

政和 (隣を見ながら) だけど、あつちは王様、こっちは庶民という感じだに。

明那 来年までになんとかするこつてん。

歩羽 (笑って) じゃ、来年はうちももっと派手にするに。

明那 (笑って) やめてよ。

音楽とアナウンスが流れる。

「とう、島民の皆様、みやもなく、間もなく二十年前の噴火の時刻になります」

明那 (アナウンスを聞きながら) 上手くならんなあ、アイツ。

五時十五分に合わせてサイレンを鳴らしますので、黙祷をお願いいたします」

そのアナウンスの途中、茂が石段から急ぎ足で帰ってくる。

アナウンスに続き、チープな音質で音楽が流れている。

茂 ……おお。

明那 もうサイレン鳴るに。なにしとった？

茂 悪い悪い。料理できるの待ったとったんだけど。

政和 あ、おかえりなさい。あれ？ で、その料理は？

茂 まだ出来とらんかったに。

明那・歩羽・政和 ええ？

明那 どういうこと？

茂 忙しくて間に合っとらんこってん。あの仕出し屋、老夫婦二人でやっとするのう。

明那 けど、うちは一週間前に頼んであったでないか。

茂 いや……なんか、オブジェ作るアーティストのグループおるだろ？

政和 ああ、最近引っ越してきたやつら……

茂 うん。あの子達が大掛かりな、鎮魂の集まりやらを開くみたいで、その注文で手一杯になつとるみたいで。

政和 あいつら……港に変な形の塔作つとったに。

茂 まあ、わいも昔、絵やつとつたで気持ちは分かるけど。

政和 今日が島の人間にとつてどういう日か分からずに騒いどるんだに。

茂 移住を推進しとるのは役場だこってん……。

政和 けど、なんか腹立つに。

明那 政和、オマア、残りのビール冷やして。あ、イス持つてきといたら？

政和 あ、おう。

政和は慌てて入っていく。

歩羽 (勝手口の中に) ほら、そろそろだよ。

明那 (茂に) で、料理はどうなるの？

茂 出来たら連絡してくれるように頼んできた。そしたらわい、もう一回取りに行くわ。

明那 そつか。悪いなあ。

茂 いや、それはいいんだけど。……ん？

茂は作業台にかかった布が気になる。

寺田家の勝手口から上着を着た千鶴夫も出てくる。

歩羽 料理がきてないって。

千鶴夫 え？

歩羽 (明那に) ねえ？

千鶴夫 (明那に) どういうこと？

明那 ちよっといろいろあったみたいで。

茂 間に合わなかったんですよ。今日はみんながこういうことやるに。

千鶴夫 はいはい。……(作業台の布を見て) え？ カーテン？

明那 テーブルクロスが見当たらなかったこってん。

茂 やっぱりそうか？ これ、わいの部屋のでないか。

千鶴夫 明那ちゃんは発想が独創的だねえ。

明那 ですかあ？

千鶴夫 いや、褒めた訳じゃないんだけど。

健也と栄司がイスを持って出てくる。

健也だけがいいイスを持っている。

栄司 オマア、そのイス、本当はわいのだこってん。

健也 そんなこと決まっとらんに。

栄司 わいがいつも座つとるでないか？

健也 そんなこと知らんわ。

茂 そもそも、それわいが買ったんだに。

栄司 けど、いつもはわいが座つとるに。

皆はそれぞれ同じ方向を向いて立つ。

政和が風呂のイスを持って出てくる。

明那 政和、それ……風呂のイスでないか。

政和 ダメかな？

健也 茂、料理は？

茂 後で取りに行くことになつとる。

健也 はあ？

茂 まだ出来とらんかったこってん。

安音がスカート下のスエットを脱ぎながら出てくる。

音楽が止まる。

健也 安音。オマ、そんなはしたない格好で。

安音 間に合わないと思つて。

「噴火の時刻、午後五時十五分になりました。皆様、黙祷をお願いいたします。も、み、みよくとっ」

千鶴夫　ここで？

「黙祷」

長い時間、サイレンが島中に鳴り響く。

全員、揃って目を閉じ、山の方角に向かって立っている。

サイレンが終わる。

全員　ふう。

健也　よし、じゃ、献杯するに。

皆はビールを何本か開けながら、

栄司　……あの日もちょうどこんな天気だったな。

他　うん。

それぞれ互いにグラスにビールを注ぐ。

栄司　わい、仕事終わりに空見た記憶あるに。夜、妻と星を見に行く約束して　　ったこっ

てん。

茂　おい、こっち。

政和　あ、わいの。

千鶴夫と歩羽は失敗したという気になっている。

千鶴夫　（歩羽に）やっぱりまずいよ、これは。

歩羽　うん……。

千鶴夫　普通の持って来よう。

歩羽　だね。

明那　（ビールを持って近づいて）あ、先生、ほら、グラス。

千鶴夫　いや、ちょっと別のグラスを持ってきますよ。これ、シャンパンとか入れるやつです

し、不謹慎な気がして。

明那 大丈夫ですよ。わいなんか、これ、歯磨きのコップだに。
政和 他にもグラスあるに。

健也は引き戸の前に立って、

健也 じゃ……みんないいですか？

他 はい。

栄司 オマア、今年は名前間違えるなよ。

健也 間違えんに。

千鶴夫 野々宮ばかりですからね、この島。

他 (かすかに笑う)

健也 ……ええ、あれから二十年が経ちました。故人を偲んでささやかな……

遠くで花火が打ち上がる音。

全員 ん？

歩羽 花火？

千鶴夫 かなあ。

明那 どっかりした。

政和 あのグループだに……。

茂 ああ。打ち上げるって言っとった。

栄司 あいつら、今日がどういう日か分かつてるのか？ 祭りでないんだに。(寺田に) ねえ？

千鶴夫 はあ。

千鶴夫と歩羽はテーブルからなるべく離れる。

健也 ええ、続けさせてもらうに。まず……歩羽ちゃんのお父さん野々宮裕さん、お母さん野々

宮美幸さん。

歩羽 ……。

健也 政和のお父さん野々宮敬三さん、お母さん野々宮ゆかりさん。

政和 ……。

健也 明那のお父さん三笠誉さん、お母さん三笠果歩さん、弟三笠大吾君。

明那 ……。

健也 安音のお父さん野々宮徳司さん、お母さん野々宮恵子さん。

安音 ……。

健也 わいの両親、野々宮順次と紀子。それからわいの息子の……野々宮……は、はや……隼人……ふう……栄司の両親、赤城孝典さんと逸子さん、妻の英里さん。

栄司 ……。

健也 茂の両親、駿河守さんと美代さん……

茂 ……。

健也 茂の妹でもあり、わいの妻……紗和子……他、亡くなったすべての方に……献杯。

と、同じ方向にグラスを掲げる。そして一口飲む。

皆は座りながら。栄司は静かに拍手。

安音 ちょっと、拍手じゃないに。

栄司 あ。

茂 オマア、それ、毎年でないか。

栄司 条件反射だこってん。神妙な気持ちでおることには変わらないに。

安音 神妙な気持ちで手は叩かんに。

栄司 わいはそうなの。あいつらの花火とは違うわ。

千鶴夫・歩羽 ……。

千鶴夫と歩羽だけ立っている。

健也 (気がついて) 先生たちも座ったらどうですか？

千鶴夫 いや……ちょっと、ここに座るのはどうかと思って。

健也 なんで？

千鶴夫 じゃ……。

千鶴夫と歩羽は座ってみる。まるでアウトドアのレストランのよう。

他 ……。

千鶴夫 やっぱり、これ、おかしいです。

茂 ま、そこだけ不思議の国ですしのう。

千鶴夫 (立って) すみません。(歩羽に) 片付けよう。

歩羽 うん……。

健也 片付けなくてもいいでしょう？

千鶴夫 でも……

明那 そうそうそう。じゃ、こっちで一緒に。ほら、イスだけ持ってくるとか。
千鶴夫 はあ。

健也 飲みましょう。料理も来とらんでアレですけど。

茂 (携帯を見て) まだ連絡ないに。

千鶴夫と歩羽はイスを移動する。

歩羽 すみません。これ、私がやりたいって言って。

千鶴夫 僕がオツケーしちゃったから。

歩羽 違うんですよ。私、小学校の一年だったからはつきり覚えてないんですけど、母がね、
こういうの好きだったらしいんです。若い時にフランスに留学してたとかで……去年、静岡
にいるおじさんから聞いて……。

千鶴夫 そうだったの？

歩羽 うん。

千鶴夫 それで急にこんなもの買おうって言い出したの？

歩羽 まあ……。

茂 じゃ、お母さんを偲んでそうしたってことだに。ねえ？

歩羽 それもありますかねえ……。

明那 へえ。いいね。そんなこと教えてくれる親戚おつて。わいのところは誰も残っとらんに。

歩羽 だけど、明那ちゃんたちには記憶がしっかりあるでしょ？

明那 まあ、もう五年生だったこつてん。

安音 けど、だからこそ辛いつてこともあるよ。

歩羽 え？

安音 いつまでも忘れられんし。

それぞれが考える。

明那 (笑って) だけど薄くなって行くに。

栄司 何がだ？

明那 親と一緒に過ごした記憶とか……もう夢みたいな感じ。

政和 何度も思い出しとるうちに、実際にあったことか、想像なのか自信なくなるこつてん。

千鶴夫 ま、そりゃ……二十年だからね。

健也 ……だいたい、みんな、写真も残っとらんでのう。

他 (自嘲気味な笑い)

千鶴夫 被害のほとんどは火砕流と山体崩壊でしたし。

政和 さんたい？ あ、山が崩れる……。

千鶴夫 そう。

健也 家ごと飲み込まれたこってん。逃げる暇なく……。

茂 昨日も改めて資料見たけど、あの火砕流、噴火から四十五分後には南側の海まで到達してるこってん。

栄司 だいたい、床山が噴火するなんて誰も思わんでのう。

茂 ああ……

栄司 噴火警戒レベルなんて1だに。一番低いやつだったこってん。

健也 (自分に) なんでわいだけ生き残ったんだろうなあ……

明那 健ちゃん。

栄司 そりゃ、わいらは家におらんかったこってん。

健也 (千鶴夫に) 先生はうちの隼人のこと、覚えてますか？

千鶴夫 え？ あ、はい。こいつと、歩羽と同じ学年でしたし。

健也 春休みなのに、あの日は学校で行事があつて。

千鶴夫 そうです。おかげでみんな助かったんで。

健也 隼人は風邪引いottaんです。だからわいが休ませて。紗和子も、隼人が心配だつてパ

ートを早く上がつて……。それで……

茂 おい、健也。それくらいにしとけ。

健也 二十年経つてもどう処理したらいいかわからんわ。想像するといてもたつてもおられん

ようになるこってん。

明那 (頑張つて笑つて) 今年はどうした？ 去年は楽しく過ごしたでないか。

茂 やつぱり節目だでのう。

政和 変だに。普段は忘れとるのに。

栄司 けど、こうやって思い出すことは必要だに。そうしたらな、亡くなったもん達は浮かばれんに。

千鶴夫 だから儀式というものがあるんでしようね。

栄司 さすが先生、その通りですに。辛くても思い出してやる。それが生き残ったわいらの務めだに。……だから、だから……それすら忘れてのうのうとしとる奴だけは……わいは許せんに。

健也 なんの話だ？

栄司 一人おるでないか。政和。

政和 ん？

栄司 オマアの兄貴はなんだ？ 陸郎のことだに。

政和 ああ……

茂 そうそう。今年、顔も出さんのはさすがにおかしいに。

安音 ……。

明那 前に来たのいつだったけ？

政和 十年前。

栄司 それもあれだに。髪の毛紫色にして、派手な格好して現れて。

政和 うん……。

栄司 全く連絡ないんか？

政和 うん。

茂 ま、オマアの兄貴のような奴を人間の屑っていうんだに。

明那 シゲ、政和を責めるのは筋違いだこってん。

政和 明那、いいに。あの……はつきり言っとくけど、あいつには、わいが一番腹立つとるに。
もうあいつのことを兄貴だとは思っとらんこってん。

栄司 お、よく言った。ここは拍手で間違っとらんに。

栄司と茂は拍手。

健也 けど、あいつだってなんか事情あったのかも知れんに。

他 は？

健也 親亡くしとるんだぞ。何にも思わん訳ないこってん。

栄司 オマア、なんであいつを庇うんだ？

健也 別に庇っとる訳ではないに。

栄司 まだ学校行つとった政和をわいらに預けたまま、戻ってもこんかつたんだぞ。

健也 まあ、そりゃ。

栄司 あいつは裏切り者だに。

栄司と茂は拍手。

安音 (思わず立ち上がった) あの。

皆は安音を見る。

他 ……？

安音 うん……。

栄司 どうした？

安音 わい、ずっと黙つとったことあって。

政和 ……え？

健也 黙っとったことって？

安音 ……少し言いにくいことだに。

他 ？

間。

千鶴夫 ……あ、あれですかね？ 家族の話だったら僕ら、ちよつと中に入ってたでしょうか？

安音 いや、先生と歩羽ちゃんいた方が…揉めたら…仲裁してもらいたいこつてん。

茂 揉めたらつて…おい、一体、なんだ？ そんな深刻な話か？

安音 うん。

明那 安音？ どうした？

安音 じゃ、思い切つて言う。

他 ……。

安音 まず、わいが…わいが…みんなに心配かけとるのは分かつとる。一昨年のこともあつたし。たしかにあの頃はいじけとつたし。

他 ……。

安音 だから今朝だつて、みんなが大騒ぎしたんだつてことも理解しとる。

健也 そんな大騒ぎはしとらんけどな。

栄司・茂 おお。

安音 いいつて。一つだけはつきりしとるのは、今はそんなことはないの。割と元気。

健也・栄司・茂 おお……。

安音 明那、本当だよ。

明那 ああ……。

安音 ただ、隠しとることがあつて、それでイライラしとるだけだに。

茂 だからなんの話だ？

皆は心配そうに顔を見合わせる。

と、政和が立つて……

茂 え？

政和 安音。

安音 ん？

政和 さつきわいに、その…あの話か？

安音 そう。

政和 それだったら、今はやめた方が……。

健也 なんだ？ 政和は知つとるのか？

政和 いや、聞いてはおらんけど、だいたいの想像は出来とる。
健也 なんだ？

政和 え？ 安音、わいの口から言つてもいいかのう？

安音 本当に分かつとるの？

政和 まあ、多分。

安音 え？ 本当に？

政和 うん。わいは小さい頃から、オマアを見て来とるでう。(照れて)それに、あれは、あれはいくら鈍いわいでも分かるわ。

安音 ああ……。

栄司 なんだ、どっちでもいいで、早く言え。

政和 ……多分、安音は……好きな人がおるんだと思う。

他 え？

政和 (安音に) どうだ？ 合つとるか？

安音 ……うん。

他 おおお。

健也 (立って) ええ？ おい。誰だ？ それは一体誰だ？

栄司 (立って) そうだ、おい、どこのどいつだ？

茂 (立って) 安音！

千鶴夫 三人とも落ち着いてください。安音ちゃんも大人なんですから。好きな人の一人や二人いてもおかしくないでしょう？

健也 (座る) まあ、そりゃ、そうだけど。

栄司 (座りながら優しく) どちらのお方？

茂 (座りながら優しく) 安音？

安音 うん……。

健也 ……政和、オマアでいい。誰だ？

政和 多分、一番言いにくい相手だこつてん…… (安音に) 合つとるか？

安音 うん。

他 ええええ。

明那 そんな話、わいも全然知らんかったに。誰？ 安音、誰？

みんな安音に注目。

間。

安音 ああ、無理！ ごめん。やっぱりわいの口からはよう言わんに。

他 ええ？

安音 政和から聞いて。わい、トイレ行ってくる。
健也 おい、待て！

安音は家の中に逃げていく。

健也・栄司・茂 えええ……。

明那 政和、誰だ？

皆の視線は政和に、

政和 ……多分、わい。

他 ええ？

政和 うん。わいではないかと……思つとる。

明那 嘘だろ？ 本当に？

政和 多分。

茂 けど、オマアら、兄妹みたいなもんでないか。

政和 うん。

茂 いつから、そんな……。

栄司 おい、それは確実なことか？

政和 ……わいと安音はずっと隣同士で育つたに。正直いうと、わいがここで一緒に暮らそう
と思つたのも、安音をほつとけんかつたつていうのもあるに。だから……

健也 待て待て。え？ オマアらはすでにそういうアレなんか？

政和 え？

健也 その……なんというか……お互いに気持ちを伝え合つとるのか？

政和 いや、それはまだだけど……。さっき、安音がそれを言おうとした時、まさにその時、
健也さんと栄司さん、ビール持つて帰ってきたに。

栄司 あの前にそんなドラマチックな時間が流れとつたのか？

政和 (照れて) あとは本人に聞いてくれ。もちろんわいもはっきり聞いたわけではないに。
これ以上は勝手なこと言えんこつてん。

明那 ……なにそれ？ ええ？ 気持ち悪い。

政和 何が？

明那 オマア、安音のこと、そんな風に見とつたのか？

政和 違うに。もちろん、わいも、兄だと思つて接して来とるよ。今日の今日までそうだった
に。

明那 で、急にか？

政和 ……うん。朝、安音のやたら派手なパンツ見て、イヤらしい意味でなくて、ああ、すっかり大人なんだと再認識したに。そんな時、安音から話があるって言われて……その……。

明那 なんだそれ？ ……ちなみにはわいのだに。

政和 え？

栄司 明那、オマアは何をはいとるんだ？ えらい派手なヤツだったのう。

明那 そんなの勝手でないか。

栄司 けど、あんなもの誰に見せるんだ？

明那 あんな、誰かに見せる為にはいとるんでないで。

歩羽 そうですよ。栄司さん、最低。

栄司 違うに。そういう意味でないに。

歩羽 じゃどういう意味ですか？

千鶴夫 あ、話が違う方向に行ってますよ。

歩羽 栄司さん、はっきり言いますけど、女性の下着は男性の為にあるんじゃないんです。わ

かってます？

千鶴夫 おい、お前も。

歩羽 え？ 庇うの？ 同類なの？

千鶴夫 違うって。仲裁してるだけ。

と、安音がそっと引き戸を開けて顔を出ず。

他 ……。

出てきながら……。

安音 え？ 政和、言ったの？

政和 ……うん。

健也 安音……それは……本当なのか？

安音 まあ、うん。……怒ったよね？

栄司 怒ったというより……驚いとる。

茂 確かになあ。

明那 わいは……わいはちよつと嫌な気分。

安音 ……。

茂 で、これからどうするんだ？

安音 ……家を出ようと思って。

他 え？

安音 東京に行って一緒に暮らす。

他 は？

政和 東京に？

安音 うん。

政和 どうして？

安音 東京に住んどのに。そういう相談はしとる。

政和 誰と？

安音 陸郎さん。

他 ……ん？

栄司 陸郎？

安音 うん。…みんな、誤解しとるに。あの人、島のことだつて忘れとらんし、隠れて何度も墓参りにも来とる。今は通販会社で働いて、生活も安定しとるし。

皆はなんのことが分からない。

健也 え？ なんで陸郎の話になつとるんだ？

栄司 そうだわ。あんな裏切りもの…

間。

他 ん？

健也 おい、安音…オマアの好きな人つて…。

安音 え？ そう…陸郎さん。

他 え？ えええ？

安音 は？ なんで？ 聞いたんでないの？

栄司 それは、それは許さんでな。絶対に許さんでな！

安音 けど、もう随分前から付き合つとるに！ あん人はみんなが言うような人でないに。今日だつて、ちゃんと島に戻つて来とる。

他 は？

安音 今朝もわい…ちよつとだけ会つとつたに。

明那 オマア、それでおらんかったんか？

安音 ごめん。

明那 おかしいと思つたんだに。ビーンドラッグ行つとつたつて、すれ違いもせんかったこつてん。

千鶴夫 あ！

他 ……？

千鶴夫 いや、あ、あれ…：ああ。

歩羽 どうしたの？

千鶴夫 あの人か…：そうか…：

歩羽 だからどうしたの？

千鶴夫 転校生にはぶつからなかったけど…：

歩羽 ん？

千鶴夫 いた、いた。

安音 (みんなに) とにかく、もう決めたことだこってん。

他 ……。

皆は呆気にとられている。

政和 ……許せんわ…：あのクソ兄貴…：

と、政和は座り込む。

暗転。

クビキリギスが鳴いている。

その夜。

誰もいなくなったテラス。

そこに陸郎がやってくる。

陸郎 ……。

寺田家からはテレビの音が漏れ聞こえている。

陸郎はそっとテラスに上がりこむ。

やがて二階の窓が開いて政和が顔を出す。

慌てて隠れる陸郎。

政和 ……？

政和は窓を閉める。

陸郎 ……。

そのまま虫の声だけが大きく。

第三場

翌日の昼間。

寺田家の前に座っているのは野々宮陸郎。

テラスには健也、栄司、茂。

間に挟まれる形で千鶴夫が座っている。

栄司 (陸郎に向かって) なんとか言え!

陸郎 はあ?

栄司 なんとか言えって言っとるに。

千鶴夫 栄司さん、大きな声出すのはやめましょうよ。

栄司 そうだけど、何にも言わずに黙っとるのはおかしいこってん。

陸郎 聞かれたことには答えとるに。

茂 オマア、その態度だに。態度がちよつとえらそうなんだよ。

陸郎 えらそうになんてしとらんよ。

栄司 このコソ泥が。

陸郎 ……コソ泥って何?

栄司 わいらに隠れて陰でコソコソしやがって。コソ泥でないか。

陸郎 意味分からん。

栄司 コソコソしとるからコソ泥だこってん!

陸郎 (笑って) 泥の部分は?

栄司 は?

陸郎 いや、コソコソしてるからコソ泥って、泥はどこに?

栄司 泥棒の泥だに。決まっとるこってん。

陸郎 俺のどこが泥棒だよ?

栄司 安音の心を盗んで。

他 ……ん?

栄司 そうだろ?

健也 オマア、考えて喋れ。なんだ? 安音の心を盗むって。薄っぺらいんだよ言葉が。

栄司 安音の心を盗んだでないか。つまりこいつは恋泥棒だこってん。

茂 さらに薄っぺらくなったに。

栄司 なんだ？ オマアらはどっちの味方だ？ ええ？

千鶴夫 敵とか味方の問題じゃないですから。

陸郎 そりゃ、長い間顔を出さなかったことは悪いと思つとるに。けど、俺と安音ちゃんが結婚することのどこが悪いの？

健也 いや、悪くはない。悪くはないけど……わいらは安音のことを娘だと思つて育ててきてだな……

陸郎 あの子だつてもう大人なんだから。

千鶴夫 いや、けど、陸郎君、いや陸郎さんも三人の気持ちは理解してあげて。

陸郎 気持ちって何ですか？

千鶴夫 ほら、急なことだし。多分、この人たちには色んな思いがあるんだよ。弟の政和君の面倒だつてずっと見てきて。

陸郎 それは感謝しとりますよ。だけどあいつの高校の学費は僕が出しましたし、学校出てからの生活費はあいつ自分で稼いどるんですよ？

茂 わいらはお金のことなんか話しとらんに。

陸郎 じゃ、何？

栄司 オマアがコソコソ隠れてやつとつたことに腹が立つとるんだに。

陸郎 コソコソなんてしとらんつて。安音ちゃんに聞いてくれつて。

健也 ……安音も一緒に話した方がいいか。

茂 ま、そうかもな。

千鶴夫 僕もそう思いますね。

栄司 ダメだに。

健也 なんで？

栄司 ダメなもんはダメだに。

陸郎 ……もう、そんな風だからあの子だつて家を出たがるんだよ。

他 は？

陸郎 言つてたよ。父親面して鬱陶しいつて。

健也 (驚いて) 誰が？

陸郎 安音ちゃんに決まつてるだろ。

千鶴夫 あ、陸郎君、いや、陸郎さん、そんなことは言わない方が。

陸郎 え？

千鶴夫 それ、安音ちゃんと陸郎君との間での会話でしょ？ あ、陸郎君でいいよね？

陸郎 は？

千鶴夫 いや、「さん」か「君」か、もう一つ距離感がつかめなくて。

陸郎 先生の好きな方で、いや、寺田さんの好きな方でいいですよ。あ、ちなみに僕はどっち

で呼べば？

千鶴夫 陸郎……君の好きな方で。

陸郎 じゃ、寺田さんで。

茂 そんなこといいだろ？

健也 陸郎。安音がそう言ったのか？ 俺たちのことを鬱陶しいって？

陸郎 ……いや……。

茂 言えよ。オマア、正直に言えよ。

陸郎 ……いや、主に栄司さんのこととか。

栄司 はあ？

陸郎 親切だけど、押し付けがましいって。

健也・茂 おお。

栄司 わ、わいか……なんで？

陸郎 知らんよ。言っとった。

栄司 ええ？ なんだ？ おいおい、小さい頃だって、わい、あいつらにスカート買ってやりしとったのに。

陸郎 あ、そのスカートの話もしとったよ。中学一年の時だろ？ あまりに変なスカートだから履けなかったって。

栄司 え？ 嘘だろ？ あいつ、あいつもつたいなくて履けないって。

陸郎 だって、一面にタコのイラストがプリントされとるやつだったんだろ？

栄司 そう。高かったに。こんな大きなリアルなタコが描いてあって、ちゃんとこの辺りに漏斗(ろうと)があつて、あ、あの口みたいなのやつな。で、八本の触手がちようどヒダに沿つてな。あ、あれも足でなくて手に。

茂 タコの細かい解説はいいに。

千鶴夫 そんなものどこで買ったんですか？

栄司 静岡行つた時見つけて。安音にはタコ、明那にはエビのやつあげたこつてん。それに明那はちゃんと履いとつたに。

陸郎 無理して履いとつたんだろ。それも安音ちゃんが言っとった。

健也 明那、履いとつたなあ。エビのやつ。

茂 おお、履いとつた。気持ち悪かつたに、あれ。

陸郎 うん。からかわれてたって。

栄司 え？

陸郎 友達からは「エビ人間」って呼ばれて。

栄司 本当か、それ？

陸郎 気を使つとつたんじゃないの。本当の父親じゃないから。

千鶴夫 陸郎君！ そんな言い方はないでしょう。うん、そんな言い方はない。

陸郎 ……寺田さん、あなたは何ですか？
千鶴夫 え？

陸郎 さつきから口挟んで来ますけど。

千鶴夫 え？ いや、仲裁を……。

陸郎 そんなことしなくても結構ですから。

健也 いや、わいらが頼んだに。

陸郎 俺は頼んでないこつてん。

千鶴夫 あ、ああ……（少し気分を害して）だったら帰りますよ。私だつてこんなことに首突っ込みたくないですから。

健也 いや、先生。

千鶴夫 いいんです。ま、ちよつと心外ですけど（陸郎に）私はどちらかといえば陸郎君の応援をしてたつもりだったんで。

陸郎 え？ そうなんですか？

千鶴夫 はい。だけど陸郎君が邪魔だつて言うなら帰ります。

陸郎 すみません。あの、だったらいてもらつて。

千鶴夫 都合よく使わないでください。

健也 （笑つて）いや、先生、すみません。できたらおつてください。

千鶴夫 でも……。

健也 それに、わいらだつて怒つとるわけじゃないんです。あまりにいきなりだつたもんだから驚いとるだけです。

茂 そうそう。すぐに「はいそうですか」とはならんに。

千鶴夫 なりませんか？

茂 ならんでしょう？

千鶴夫 へえ。

茂 先生、自分のこととして考えてくださいよ。歩羽ちゃんがいきなり結婚するつて言つたらどうします？

千鶴夫 私はすんなり認めますけど。

三人 いやいや。

栄司 それは嘘だに。

千鶴夫 嘘じゃないですよ。

栄司 先生は絶対に怒る。

千鶴夫 怒りませんつて。（茂に）怒るように見えます？

茂 うんん。それに関しては栄司の言うとおりでだと思いますに。

千鶴夫 ……。

栄司 あんたのどこ、まるで夫婦だこつてん。

茂と栄司は笑う。

千鶴夫 どういうことですか？

栄司 わいら、いつも言っとりますに。

健也 ま、確かに傍から見とったら「おお」と思うことはありませんに。

千鶴夫 「おお」と思うこと？

健也 そうでしょ？ 休みの日もいつも一緒に出かけて。

茂 新婚ほやほやって感じだわなあ。

三人は笑う。

千鶴夫 ……。

歩羽が勝手口からでてくる。

歩羽 ……どうも。

他 おう。

歩羽 (笑って) 何がそんなに面白いんですか？

健也たち いや。

歩羽 (陸郎に) あ……初めましてじゃないんですけど……寺田歩羽です。

陸郎 野々宮、陸郎です。政和の兄で。

歩羽 (笑顔で) 知ってますに。それに、十年前、紫の髪の毛してた時覚えてますから。あの時、ちよつと喋ったんですよ。

陸郎 あ、高校生だったあの……

歩羽 そうですそうです。

千鶴夫 何？ どうしたの？

歩羽 いや……お昼ご飯どうするのかなど思っ

千鶴夫 ああ。

歩羽 まだ、お話が長引くようならアレだけ……。

栄司 え？ もうそんな時間か？

歩羽 はい。

お昼のサイレン音。

三人 おお。

陸郎 ……ねえ、俺、どうなるの？ いつになったら認めてくれるの？

栄司 一つになったらって、まだ話し出したばかりだし。

健也 オマア、どこに泊まっとるんだ？

陸郎 鷺沼旅館。だけど明日、東京に帰るこつてん。今日中に話をつけたいんだわ。

歩羽 (千鶴夫に) で、どうする？ オムライス作ったけど。

茂 あ、いいねえ、オムライスなんだ。

歩羽 はい。

千鶴夫 あ、食べといて。俺は俺で勝手にするから。

歩羽 は？

千鶴夫 あの、前から言おうと思ってたんだけど、一々俺のご飯とか気にしなくていいから。

歩羽 ええ？

千鶴夫 うん。

健也たちは顔を見合わせる。

茂 ……先生？

歩羽 いきなり何？

千鶴夫 そういうこと。

歩羽 よくわからないけど……。

健也 先生、わいらもご飯は食べますから。

歩羽 だって二便の船に乗るんでしょ？

茂 え？ あ、どっか行くの？

歩羽 ええ、一緒に多田島のスーパー行こうって言ってて。

栄司 お、親子で買い物だに。

健也・茂 おお。

千鶴夫 あ、それ……俺は行かない。

歩羽 は？ 行きたいって言ったの自分だよ。

千鶴夫 お前は予定ないの？ 友達と遊ぶとか。

歩羽 あるわけないでしょ？

千鶴夫 とにかく俺はスーパーには行かない。

歩羽 まあ、それはいいけど、オムライスはどうする？ だったらラップしといたらいい？

千鶴夫 俺はいい。外で食べるから。

歩羽 は？

茂 ちよつと、先生？

栄司 思った以上に気にしとるに。

歩羽 外で？ え？ みなさんと？

千鶴夫 ……いや、出かけるから、一人で。

歩羽 どこに？

千鶴夫 どこだっていいだろ？ 俺にも予定はあるんだよ。

歩羽 だったら先に言っといてよ。

茂 いや、とにかく昼は家で食べたらどうですか？

栄司 そうだに。そんな、極端な。

健也 オムライス、きつと美味しいに。

歩羽 (千鶴夫に) どうしたの？

千鶴夫 どうもしてないよ。

歩羽 様子がおかしいから。(みんなに) この人、なんかあったんですか？

千鶴夫 (笑って) この人ってなんだよ。

歩羽 は？

茂 ……ふうちゃん、ごめんね。わいらが悪いに。

栄司 そうそう。二人が仲良いつてひやかしたもんだから。

千鶴夫 そんなことは関係ありませんよ。

栄司 関係あるこつてん。それを気にして。

千鶴夫 違いますよ。(歩羽に) とにかくオムライスはいららない。

健也 先生、食べたほうが……。

千鶴夫 食べません、オムライスは食べません！

歩羽 ……わかった。

千鶴夫 (健也たちに話の続きを促す) で？ で？

健也たち ああ……。

引き戸が開き、明那が出てくる。

明那 話はどうなつとる？ 昼になったけど。

栄司 まだまだこれからだに。

明那 あれ？ 歩羽ちゃん。

歩羽 うん……。

健也 なんだ？

明那 いや、レモン焼きそば作ったに。

健也 おお。

陸郎 ……安音ちゃんは？

明那 部屋で食べてますに。栄司さんから出てくるなって言われとるこつてん。

陸郎 (健也たちに) ちょっと会わせてよ。

栄司 ダメだに。

陸郎 どうして？

栄司 会うのは話が決着してからだこってん。

陸郎 ……。

明那 あの…安音と会うのはいいんですけど、政和とも話してやってください。

陸郎 いやあ、俺は話したいんですけど。え？ あいつが怒っとるんですよ？

明那 はい。籠城しますに。一生出てこないって宣言して。

茂 心配だわなあ。

明那 ま、焼きそばは食べとるみたいだけど。

健也 あいつはな…安音のことが好きだったに。なのに音信不通だった兄貴と付き合っとた

って、いきなり聞かされて…それで怒っとるこってん。

陸郎 ……。

明那 で、こっちは？ レモン焼きそば？

栄司 おお、食べる。

茂 わいも。けどレモン焼きそば…

明那 ちゃんとレモン抜いてある皿あるに。

陸郎 それただの焼きそば…

明那 健ちゃんは？

健也 うん、食べる。

明那 だったら居間に並べてあるに。

三人が立ち上がる。

陸郎 待つてよ。俺は？ わいのお昼ご飯はどうなるの？

栄司 オマアは食べる権利ないに。

陸郎 まだ話、続くんたる？

健也 どっかで食べてこい。

陸郎 どっかって…近くにカフェとかある？

明那 カフェ？

栄司 そんな洒落たもんあるわけないに。

明那 一応、レモン焼きそば余っとるけど。

陸郎 そうなんですか？ じゃあ…

栄司 ダメだつて言つとるこってん！ 明那、勝手なこと言うな。

明那 (陸郎に) ですって。

栄司 (去ろうとして) さてさて。

歩羽 (陸郎に) あ……食べますか？

陸郎 え？

歩羽 オムライスでよかったら……一つ余っちゃったんで。

陸郎 ああ、え？ いいんですか？

栄司 おい！ どこまで図々しいんだ、オマアは。

明那 ほら、食べるなら早くして。

栄司 おお。陸郎、逃げるなよ。すぐに戻ってくるに。

陸郎 逃げないよ。

明那は入っていく。

健也たち三人も家の中に入っていく。

歩羽 食べます？

陸郎 あ、それはありがたいんですけど……。

歩羽 (千鶴夫に) 本当にいらなのよね？

千鶴夫 うん。

陸郎 よかった。だいたい、僕、小さい頃からレモン焼きそば嫌いなんですよ。

歩羽 持ってきたましようか？ あ、それとも、うちで食べます？

陸郎 いやあ……上がりこむわけには。

歩羽 大丈夫です。嫌じゃなかったら、家の中で食べてください。

陸郎 どうしてですか？

歩羽 ちよっと、私、この人と話がありますから。

陸郎 え？

千鶴夫 ……。

歩羽 勝手口からですけど、どうぞ。

と、歩羽は勝手口を開ける。

陸郎 (千鶴夫に) あの……しかし……え？ 寺田さん。

千鶴夫 あ、どうぞ。こいつがいろいろ言ってるんですから。

陸郎 はあ……。

陸郎は勝手口に、

歩羽は指をさして、

歩羽 テーブルの上にありますので。

陸郎 え？ 本当にながっていいんですか？

歩羽 はいはい。突き当たりが洗面所。

陸郎 ああ……では、失礼して……なんか、すみません、いきなりな展開で。

歩羽 (笑って) 余っちゃっても困りますから。

陸郎 はい……。

と、陸郎は恐る恐る入っていく。

勝手口のドアを歩羽が閉める。

歩羽は千鶴夫を睨んで、

歩羽 ……なに？ どうしたの？

千鶴夫 ん？

歩羽 みんなから一体、何言われたのよ。

千鶴夫 別に何も言われてないけど……。

歩羽 栄司さん言ってたじゃないの。冷やかされたんでしょ？

千鶴夫 うん……。

歩羽 それでご飯いらないとか……子供じゃないんだから。

千鶴夫 ……。

歩羽 変な意地張って、オムライス大好物なのに。

千鶴夫もどうしていいかわからず、

歩羽 ただ親子で仲良いだけでしょ？ どこが悪いの？

千鶴夫 別に悪くないよ。

歩羽 だったら気にしなくてもいいじゃないの。

千鶴夫 ……いや、俺も思ってたから。

歩羽 え？

千鶴夫 これからのこととか、考えてたからさ。

歩羽 これから？

千鶴夫 いつまでも俺とここで暮らしてる訳にもいかないんだから。

歩羽 なんて？

千鶴夫 なんてって、そうだろ？ お前にも、俺にだって、これからがあるんだし。

歩羽 なんの話を……

と、言いかけると勝手口のドアから陸郎が顔を出して、

陸郎 本当に申し訳ないんですけど……

歩羽 はい？

陸郎 スプーンがなくて。

歩羽 すみません。流しの横に白い戸棚ありますよね。

陸郎 あ、かなあ。

歩羽 右側の二段目の引き出しに入ってますから。

陸郎 右側の二段目。……すみません。

と、陸郎は消える。

歩羽 (千鶴夫に) なんのこと？

千鶴夫はやや躊躇してから、

千鶴夫 ……お前さ……怒っただろ？

歩羽 何が？

千鶴夫 去年だよ。

歩羽 去年？

千鶴夫 うん。夏だよ。牧子ちゃんが家に来てた時。

歩羽 はあ？

千鶴夫 帰ってからもずっと文句言ってたじゃないの。

歩羽 それが何？

千鶴夫 ……。

歩羽 え？ やっぱりあの人となんかあったの？

千鶴夫 ……。

歩羽 あのね、私、別に……(千鶴夫を指して)が、誰かを好きになったり、それで、ほら、

再婚するとか、いいと思ってるよ。むしろ祝福する。

千鶴夫 本当？

歩羽 本当だって。私がブツブツ言ってたのは相手の問題。病気で亡くなった妻の妹っていう

のが嫌だって言ってたの。

千鶴夫 それ関係ある？

歩羽 関係あるよ。なんか嫌だもん。え？ やっぱりあの人とあったんだ？

千鶴夫 あったっていうか……

歩羽 うわ、最低。

千鶴夫 違うよ。牧子ちゃん、陽子が亡くなってからずっと力になってくれて、それに……あの子も去年離婚したからさ。

歩羽 うわ、なにそのありがちでありえない展開。

千鶴夫 ほら、そういうこと言うじゃない。そしたら俺だってどうにも出来ないよ。だからないよ。牧子ちゃんとも進展ないよ。

歩羽 ……じゃ、反対に言わしてもらうけど、私にだってそうじゃん。

千鶴夫 は？

歩羽 だって……

と、言いかけると勝手口から陸郎が顔を出して、

陸郎 なんか、度々申し訳ないんですけど……

歩羽 え？ あの、なんですか？

陸郎 お水を……。

歩羽 水道のを飲んでください。この島の水美味しいんで。知ってると思いますけど。

陸郎 いや、グラス、どれを……？

歩羽 どれでもいいですから。

陸郎 では……あ、卵ふわふわですね、オムライス。

歩羽 はあ。

陸郎 あれ、真ん中切ってトロって両側につてやつですよ？ 難しくないですか？

歩羽 簡単です。

陸郎 え？ どうやって？

歩羽 よく観察してください。

歩羽は陸郎を家の中に入れてドアを閉める。

歩羽 (千鶴夫に) あのさ、私が男の子と付き合くと、毎回悪口言うじゃん。

千鶴夫 言わないよ。

歩羽 (笑って) いや、言うね。絶対に反対するもん。

千鶴夫 ……そりゃ……世の父親は誰だってそういうもんだって。娘の彼氏とか、いい気はしないんだよ。

歩羽 ほらあ。

千鶴夫 でも……たとえ俺がブツブツ言ったところで関係ないんだって。好きだったら親と仲

違いしても相手を選ぶんだよ、普通。

間。

歩羽 ……普通はね。

千鶴夫 ……は？

歩羽 普通じゃないから困ってる。

千鶴夫 どこが普通じゃないの？

歩羽 血繋がってないから。

千鶴夫 そんな親子いくらでもいるよ。みんな普通にしてるよ。

歩羽 だから普通ってなによ？

千鶴夫 普通は普通だよ。

歩羽 わからないもん。私にはわからないの、普通が。……私に彼氏ができて、私が結婚して、
(千鶴夫を指して) ……が、再婚して……別々に暮らして……そうだったら……そうなって
も父と娘のままいられる？

千鶴夫 当たり前だろ？

歩羽 このままだよ。このまま、仲良いままだよ？

千鶴夫 おう。

歩羽もテラスに上がり、イスに座って、

歩羽 ……私だって将来のこと考えることある。

千鶴夫 ……。

歩羽 だけど想像出来ないんだよ。(千鶴夫を指して) ……と、離れて暮らしてる姿。

千鶴夫 お父さん。

歩羽 え？

千鶴夫 (笑って) ……と、ってなんだよ？ お父さんだよ。

歩羽 普段呼ばないから。

千鶴夫 呼ばなくても、お父さんなんだよ、俺は。

歩羽 分かってるって。

千鶴夫 なんだよ、この会話？

歩羽 それ、わいが言いたいに。

千鶴夫 しかも隣の家のテラスの上で。

歩羽 ……なんでこのままじゃダメなの？ 楽しいじゃん、毎日。

千鶴夫 今はな。

歩羽 そんなに嫌ならどうしてわいを娘にしたの？ 静岡のおじちゃんのところへ渡せばよかったに。

千鶴夫 お前な……

千鶴夫は一瞬腹を立てたようだが、すぐに静かになり。

千鶴夫 ……噴火のあと、児童たちを連れて避難所まで歩いて……その時もお前、俺の横を歩いて。

歩羽 覚えてるよ。

千鶴夫 ……避難所でお前の両親が亡くなったって分かった時、俺、お前にそれを告げないといけないくてさ。

歩羽 ……。

千鶴夫 小学校一年生の子にどんな言葉で伝えたらいいのか、本当に分からなくて。聞いてもお前はじっとしてて。泣きもしないし、なにも言わないし。三十分くらい黙ってて、いきなり小さな声で呟いたんだよ。「わい、一人になっちゃったの？」って……俺の、俺のズボンを、太ももごと掴んで。……俺が抱き寄せたら急に泣き出して、もうわんわん泣いて。「先生どこにも行かないで」って。

歩羽 ……。

千鶴夫 三ヶ月経って、静岡から親戚が引き取りに来た時もお前は俺にしがみついて離れなくて。だから……養子縁組して、娘にして……。

歩羽 ……。

千鶴夫 自然なことだったよ。お前はまだ分からないかもしれないけど、分岐点なんてそんなもんだし。その時々々の行動がさ、振り返ると人生決めてたりするの。

歩羽 (笑って) で？ 後悔してるって話？

千鶴夫 違うよ。するわけないだろ？……ただ、それが今まで続いちゃってるから。どこかで一区切りつけないと、二人ともダメになっちゃうだろ？

歩羽 ダメになるってなに？ そんなにおかしい？ その区切りって今なの？

千鶴夫 ……。

歩羽 言ってることはわかる。だけど今決める必要ないって私は思ってる。

千鶴夫 ……。

歩羽 心配しなくても、ちゃんと私だって独立するし。いいよ。あの牧子さんと一緒になったかったらなればいいじゃないの。

千鶴夫 牧子ちゃんとは……もう……ないけど。

歩羽 ないの？

千鶴夫 うん。

歩羽 (少し安心した感じで) へえ。……とにかくそう思ってます。
千鶴夫 分かった。

二人の間に日常に戻る。

歩羽 (笑って) だいたいさ、おかしいって言えば(野々宮家を指して) ここだってそうでしょ？
うちよりよっぽど歪だと思っよ。

千鶴夫 まあな。

歩羽 だから栄司さん達に冷やかされる筋合いないのよ。

千鶴夫 ……。

歩羽 この人たち、悪気ないんだと思うけど……本当、ずけずけ物言うしね。

千鶴夫 うん。

歩羽 一時、やたら言葉のこととかも冷やされてたでしょ？

千鶴夫 (笑って) ああ、だから諦めたもん。

歩羽 頑張って「こってん」とか使ってたのにな。

千鶴夫 うん。けど、いちいちおかしいって笑われたし。

歩羽 冗談を言う方には他意なくとも、言われた方は傷つくもんね。とに。

千鶴夫 ……(勝手口を見て) ああ。

歩羽 どうしたの？

千鶴夫 お腹すいたよ。オムライス食いたかったなあ。

歩羽 食べたらいいでしょ？

千鶴夫 だって、陸郎君が……。

歩羽 私のあるから。それ食べな。

千鶴夫 いいよ。

歩羽 私はなんとでもなるし。

と、引き戸が開いて安音が出てくる。

そっと閉める。

安音 あれ？ 二人？

歩羽 なに？

安音 いない？ どっか行った？

歩羽 ああ、あの人？ 陸郎さん？

安音 そう。……(家を窺って) ご飯食べとるから、今だったらと思って。一瞬だけでも会えんかなと。一瞬ね、ほんの一瞬。

歩羽 あの人なら、うちでオムライス食べとるに。

安音 え？ ん？ 話が見えないんだけど。

千鶴夫 会ってきたら？

安音 え？ いいんですか？ だけど……どうして先生の家に？

千鶴夫 まあ。

安音 しかもオムライス？

千鶴夫 彼から聞きなよ。

歩羽 でも、三人が知ったら怒るよね。

千鶴夫 大丈夫。付き合ってる二人が会えないなんておかしいし。久しぶりなんでしょ？

安音 そうです。

千鶴夫 責任は俺がとるから。

歩羽 おお、格好いい。でも栄司さんとか……。

千鶴夫 そんなのガツンと言いつ返ししてやるよ。

安音 頼もしい。

歩羽 本当かなあ？

千鶴夫 本当だよ。(安音に) ほら、ジュリエットは早く行きなさい、ロミオの所へ。

安音 え？ なに？

歩羽 気にしないで。

千鶴夫 (安音に) あ、その代わり安音ちゃん出る時は玄関からね。できたら見つからないように。

歩羽 ビビってるじゃん。

安音は急いで千鶴夫家の勝手口に。

安音 ありがとうございます。あ、ありがとうございます……。(家に入って行きながら) 陸郎さあん。

と、入ってドアが閉まる。

千鶴夫 ……これで完全に無理になったな。

歩羽 何が？

千鶴夫 オムライス。

歩羽 ま、あの二人と並んでオムライス食べるのは勇気いるもんね。

千鶴夫 だな。

歩羽 というか、家に戻れないんだけど。

千鶴夫 どうして？

歩羽 キスとかしてたらどうするのよ？

千鶴夫 ええ？ そんなこと……うちでするか？ あ、そっか。キスくらいはするな。え？ するか？……いやあ、するな。え？ するか？

歩羽 知らないけど。ねえ、話が終わったらスーパー行こうよ。まだ船、間に合うし。あれ買っつて言っただでしょ？ なんだっけ？ 文字が二倍に見えるメガネ。

千鶴夫 おお、あれはな、前から欲しかったし。

勢いよく引き戸が開き、箸を持ったままの栄司が飛び出てくる。

栄司 先生！

千鶴夫 え？

栄司 あれ？ 陸郎は？ いや、安音は？

千鶴夫 え？ いや……

栄司 安音、今、ここから出て来たこっつん。だろ？

千鶴夫 それは……わからないです。

栄司 わからんってなんだ？ 歩羽ちゃん、陸郎はどこだ？ オムライス勧めとっただろ？ ど

こで食べとる？ というか、安音が出てきただろ？ どこに行ったんだ？

歩羽 どっち探してるんですか？

栄司 両方だに。

茂が箸を持ったまま出てきて、口をもぐもぐさせながら、

茂 おい、栄司。

栄司 なんだ？

茂 ほっとけって。

栄司 何が？

茂 健也がそう言っどる。

栄司 けど、安音、陸郎と会うつもりだに。

茂 だから会いたいなら会わせてやれって。(奥に) おい、健也！

栄司 は？ どういうことだ？

茂 知らんけど、言っどる。

栄司 オマアはなんだ？ 健也の子分か？

茂 違うに。(千鶴夫に) え？ 陸郎はどこ行ったんですか？

千鶴夫 いや……(と、歩羽を見る)

歩羽 ……家にいますよ。

千鶴夫 え？

歩羽 二人でいます。

栄司 あ、やっぱりそうだこってん！

歩羽 でも、みなさんを家には入れませんから。ここ、わいらの家なんで。

栄司 はあ？ 歩羽ちゃん、歩羽ちゃんまであいつらの味方か？

歩羽 どっちかと言えばそうですね。(千鶴夫に) ねえ、私たち入ろう。

千鶴夫 え？

歩羽 いいから。

千鶴夫 でも、キスが……

栄司 キス？

歩羽 (勝手口のドアをノックして) 入りますね！ 大丈夫。(ドアを開けて) ほら、入って。

千鶴夫 あ、(栄司に) すみません…… (中に) 入ります！

歩羽は千鶴夫を中に入れて、

歩羽 (栄司に) 鍵閉めときますから。それから……栄司さん、わいら親子、申し訳ないんですけど仲いいだけなんで。

と、勝手口のドアを勢い良く閉める。

栄司 なんだ？ なんだ、歩羽ちゃんの、あの敵意剥き出しな態度。

茂 オマア、嫌われとるんでないか？

栄司 わい何をした？ よし、こうなったら玄関から突入するか？

茂 ほっとけて。

栄司 このままズルズル安音が裏切り者と結婚してもいいんか？

茂 ……。

栄司 周りは敵ばかりだに。今、わいらが頑張らんとこの家はダメになるに。いや、この島がダメになる。いや、この世界がダメになるこってん。

茂 オマア、まるでヒーローだに。とりあえず残りのレモン焼きそば……。

栄司 わいはいらん。

茂 箸持つとるでないか。

栄司 いらん！

健也も箸を持ったまま出てきて、

健也 ……おい、いい加減にしとけ。まだ食べとるのに。

茂 栄司が、こいつがわーわー騒いどるから。

栄司 ん?……待って待って、すっかり話が変わっとるでないか。わいらは、わいらはこの結婚に
反対しとるんでないのか?

健也 反対なんかしとらん。

栄司 はあ?

健也は家の中を伺いながら引き戸を閉めて、

健也 ちょっと座れ。

栄司 なんだ?

健也 いや、三人で話したいに。だからちょっと座れ。

茂 出た。健也のちょっと座れが。

栄司 オマアなんで時々そうやってえらそうになるんだ?

健也 えらそうになんかしとらん。

栄司 小学校の時、みんなで飼ったザリガニ逃げた時もそうだったわ。えらそうにちよつ
と座れって。

健也 はあ?

栄司 あれは笑ったわ。ザリガニ逃したのは誰だとか言って。

健也 知らんわ。

栄司 見たらこいつの背中におったのでう。

健也 オマア、なんでそんな昔のこと覚えとるんだ?

茂 けど、話なら家の中でいいに。おかしいだろ? 三人とも箸を持ったまま。

健也 すぐ済ますに。いや、明那に聞かれたくないこってん。

栄司と茂は座る。

栄司 (座りながら) 一体、なんだ?

健也 ……わいはな、安音の結婚、いいことだと思っとる。

栄司 は?

健也 もちろん驚きはしたに。けど、いい機会だこってん。

栄司 いい機会ってなんだ?

健也 ……解散しよう。

二人 ん?

健也 いや、解散っておかしいな。なんて言ったらいいんだ? 全員、この家を出てバラバラ

にだなあ。

栄司 はあ？

茂 ああ。……いや、解散って言葉はおかしいわ。

健也 だな。

茂 解散は……わいらバンドでないだこってん。

健也 うん。

茂 オマア、格好いいと思ったんか？

健也 違うに。

栄司 ……待て待て待て。え？ バラバラに？

健也 うん。

栄司 なんてそんなことしないかんのだ？

健也 なんてって……おかしいだろ？ わいら、わいら小学校の時から一緒におって、いつも

三人で遊んどって。それが今も三人で住んどるんだぞ。こんなのおかしいに。

栄司 (笑って) 事情があったでないか。噴火があったからだこってん。

健也 そうだに。

栄司 オマアだってそうだろ？

健也 そうだに。分かつとる。

栄司 親やら妻やら、オマアなんか息子まで亡くして、すがるもなくて。

健也 分かつとるって言つとるだろ？

栄司 だから三人で暮らして。あいつらの面倒見て。

健也 うん。

栄司 それがわいらの生き甲斐でないか。

茂 いや、わいはちょっと違うけど……。

栄司 一緒だに。東京の美大行ったかなんか知らんけど、絵の才能もなくて困つとただけだ
ろ？戻ってきてあいつらの面倒見ること、言い訳して自分を保つとただけなこってん。

茂 オマアな！

栄司 (健也に) とにかくわいはそれは困るに！

健也 ……困るってなんだ？

栄司 そうでないか？ 急に出て行けって言われても困るでないか。茂だってそうだろ？

茂 うん……。

健也 だけどな、せつかく安音が家を出るって言つとるんだし、こんなチャンスないに。それ
に遅かれ早かれここは出ないかんに。なあ、茂。

茂 え？

健也 オマアもなんで黙つとったんだ？

茂 何が？

健也 わい、噂は聞いとるに。

茂 ああ、あれか。……いや、あれはまだ全然決まっとらんに。それに……まだ先の話だに。

栄司 なんの話だ？

茂 うん。

栄司 おい！

茂 いや、被災者たちに提供した家。そろそろ出てってもらおうという話があつて。

栄司 出てってもらおう？

茂 五年前、国からの復興資金が打ち切られたら？ 町の財政も持たんようになってるに。

栄司 は？ この家出されるんか？

茂 うん……

栄司 え？ 隣も？

茂 まあ、一緒だわ。

栄司 おいおい。え？ わいらが出てつて、どうなるんだ？

茂 この一帯を整備し直して、アーティスト達を住まわすつていう計画みたいで。

栄司 はあ？ アーティストたち？

茂 ノノミヤつていう通販やつとる会社あるだろ？ あそこが出資してくれて。あそここの社長、ルーツはこの島でこのう。

栄司 いやいや、あの家なんか戦後すぐに島出てつとるでないか。

茂 うん……。

栄司 オマア、なんの為に役場に勤めとるんだ？

茂 はあ？

栄司 わいらのように、この島で生まれ育つた人間を追い出して、訳のわからんアーティストやらを住まわす言うんか？ そんなもん、ちゃんと反対しろよ。

茂 わいにそんな力ないに。

健也 まあ、そういう話もあるんだし、安音の結婚を機にこの家を解散したらどうかとわいは思つとる。

茂 また解散つて、バンドみたいに……。

栄司 そんな……わい、そんなことになったら、これからどう生きて行つたらいいんだ？ それにあいつらだつて。

健也 あいつらも大人だろ？ このままではあいつらの為にもならん。……わいらの役割は終わつたこつてん。茂はどうだ？

茂 ……すぐには返事できんわ。

栄司 そうだわ。それになんてお前が決めるんだ？

健也 だから相談しとるんだろ？

栄司 ああ、ザリガニの時とは話が違ふんだに。

健也 そんなこと分かっとなる。……あ。

黙って健也が立ち上がる。

栄司 どうした？

健也は下手に向かって、

健也 安音！

二人 え？

健也 (下手に) おい！ 隠れとらんて出てこい。

安音はバツ悪そうに近づいてくる。

安音 ……。

栄司 オマア！ なんだ？ 陸郎に会ったっただろ？

安音 ……うん。

栄司 何をしとったんだ？

安音 何をつて……。

栄司 服が乱れとるでないか？

安音 ええ？ これは違うに。

安音は肩口をなおす。

健也 安音、誤解するな。わいらは怒っとらん。

安音 え？

健也 怒っとらんに。

栄司 健也？

健也 いや、わいはな、オマアがそうやってわいらの知らん所で人生決めてえらいなと思うに。

安音 は？

健也 うん、えらいわ、オマアは。

栄司 待て。わいは認めとらんこってん。だいたい、陸郎は島の裏切り者だに。

健也 ま、驚いたけどな。で、寂しい気分にもなったのは確かだこってん。

茂 まあ、そうだな。寂しいんだわな、わいら。

安音 ……ごめんなさい。

健也 謝る必要はないわ。
安音 でも、わい……。

と、引き戸がゆっくり開く。明那が立っている。
三人は見る。

明那 ……三人とも箸持ったままで。レモン焼きそばも残つとるでないか。
健也 あ、ごめんごめん。

明那 わいに隠れてなんの話だ？

健也 隠れてでないに。

明那 ま、全部聞いたつたけどな。

三人 え？

明那 わいは絶対に嫌だこつてん。もし、もしこの家を出されても、わいはみんなに住むに。

三人 は？

明那 (安音を見て) それにわいは安音にも猛烈に腹立つとる。

安音 え？

明那 オマアのせいで、オマアのせいでこの家がなくなるかもしれんに。

安音 どういうこと？

茂 いや、安音のせいではないだろ？

明那 この家はわいだに。

他 は？

明那 わいがこの家だこつてん。

健也 明那？

健也たちは不思議そうに明那を見ている。

暗転。

第四場

翌日の朝。

スーツケースを持った陸郎。

横に安音が立っている。

陸郎 (二階の窓に向かって) 行くからな。おい、政和！
安音 ……。

陸郎 おるんだもんな？

安音 うん。

陸郎 顔も出さんか……。

安音 船まではまだ時間随分あるに。

陸郎 養殖場に寄って、健也さんに挨拶しようと思つとるに。

安音 ああ。じゃ、(戻ろうと) もう一回、政和に声かけてこよつか？

陸郎 いや、無理にはいいわ。

安音 ……。

陸郎 付き合つたつたとかないんだよね？

安音 は？

陸郎 政和と。

安音 あるわけないに。

陸郎 そんなにアレだったのか……。

安音 え？

陸郎 いや、政和は……安音ちゃんのこと。

安音 うん。それは本当に知らなかったに。

陸郎 全く？

安音 わいに対してそういう感情を持つとつたとか……考えたこともなかったこつてん。

陸郎 うん。

安音 だからわいも、それを知つてどつかりしとるに。

陸郎 そつか。ま、いいや。お盆には来るに。その時までにはわいも準備しとくし、安音ちゃん

も家を出られるようにしといて。

安音 うん……。

陸郎が少しだけ近ずくと、安音は微妙な感じで離れる。

陸郎 なに？

安音 え？

陸郎 いま逃げた？

安音 逃げとらんけど、え？ なんかしようとした？

陸郎 うん。

安音 なにを？

陸郎 何をつて……ちよつとくつこつとしたただけだに。

安音 こんな場所では嫌だに。

陸郎 どうして？

安音 みんなおるこってん。

陸郎 え？ 家におるの政和と明那ちゃんだけだろ？

安音 ていうか、ここでは嫌。

陸郎 ……昨日の夜はなんで？

安音 は？

陸郎 結構、待ったんだけど。

安音 連絡したに。……疲れたこってん、早く寝ちゃって。

陸郎 聞いたけど……ま、普通は会いに来るに。

安音 ごめん。

陸郎 なんかあった？ 栄司さんに何か言われたとか。政和に言われたとか。

安音 あれからはみんなとも話しとらんし。

陸郎 そつか。え？ 安音ちゃんは？

安音 ん？

陸郎 いや、どう思っとるの？ 変わっとらんの？

安音 何が？

陸郎 だから、政和の気持ちを知って。

安音 別に変わらんけど。

陸郎 あいつのこと嫌い？

安音 いや、嫌いではないに。

陸郎 嫌いではない？

安音 だって、小学校五年生の時から今まで一緒に暮らしてきて。お兄ちゃんみたいな存在だこってん。

陸郎 え？ じゃ好きってこと？

安音 家族的な意味ではね。

陸郎 ふんふんふんふん。

安音 (笑って) え？ なに？

陸郎 家族的な意味で好きってどういうこと？

安音 そのままの意味。

陸郎 俺のこと好きなのとは違うの？

安音 全然違うでしょ。え？ なんの話？

陸郎 ……俺のことだって……なんというか、昔はお兄ちゃんみたいな存在だったわけでしょ？
安音 いや、陸郎さんの場合はずっと会っとならんかったし……一昨年、わいが東京遊びに行つて連絡した時、ほら、わいの愚痴を延々聞いてくれて、それで……そういう関係になって、

気持ちだが、そういうアレに変化したこってん。

陸郎 政和だって一緒でしょ。

安音 は？

陸郎 これから、家族的な好きが、そういう好きに変化する可能性だつてないわけじゃないこ
つてん。

安音 (笑つて) あり得ないに。

陸郎 言い切れる？

安音 待って。急にどうした？

陸郎 いや……複雑なんだよね。俺は東京に帰るけど、政和は安音ちゃんと一緒に住んでるわ
けでしょ……これはモヤモヤするつていうか。

安音 ええ？

陸郎 昨日も会いに来てくれんかったし、色々考えちゃつて。

安音 やめて。陸郎さんにはそういうこと言つて欲しくない。

陸郎 なんで？

安音 堂々として欲しいに。それに政和は血の繋がった弟でしょ？

陸郎 そう。

安音 弟に対してそんなこと思う？

陸郎 俺だつて思いたくないけど。

安音 だつたら言わんで。

陸郎 言いたくないよ。だけど思うんだから仕方ないだろ？

安音 嫌なの。わい、わい、陸郎さんにはそういうことは言つて欲しくないに。

陸郎 え？

安音 わいの愚痴を「うんうん」つて聞いてくれて……陸郎さんのそういう大きいところが好
きだこつてん。わいに対して、やきもち妬くような、そんな小さな人間になつて欲しくない
に。

陸郎 なんだそりゃ？ なんか……安音ちゃん、感じが違うよね？

安音 違う？

陸郎 うん。違う。

安音 ……。

陸郎 昨日からこの家の悪口全然言わなくなったし。

安音 ええ？ そんなこと話す暇もなかったに。それに陸郎さん、いつもは悪口は言うなつて。

陸郎 そうだよ。……なんだろ？ 違うんだよ。

安音 ……反省したこつてん。

陸郎 何を？

安音 これまでも散々迷惑かけて来たし。急に申し訳なくなつたつていうか。

陸郎 やっぱりそうだよ。そうなんだよね。

安音 は？

陸郎 どうするの？

安音 どうするって？

陸郎 俺たち。

安音 それは……え？ どういう意味？

陸郎 別れたいわけじゃないんだよね？

安音 当たり前でしょ？

陸郎 ふんふんふん。

安音 あ、まあ、けど……。

陸郎 ん？

安音 いや……結婚は急がんでいいかもとは……ちよつと思つとるこつてん。

陸郎 は？ 安音ちゃんが早くしてくれって言うたに。

安音 ……。

陸郎 やっぱり変わったこつてん。

安音 わいにもわからんよ。

陸郎 だから、だから心配なんだに。急に家のこと好きになった感じがして。

安音 それと陸郎さんのことは別だに。

陸郎 いや……まあ、いいけど。本当、行くわ。(窓に向かって) 政和、わい行くこつてん。政

和。政和！

引き戸が開いて政和が出てくる。

政和 あん？

陸郎 おお、そこから出て来るんか？

政和 なんだよ？

陸郎 いや、もう帰るから。

政和 勝手に帰ったらしいに。

陸郎 その前に顔くらいと思つて。

政和 ふん。安音とイチャイチャして……わいに何かとてつもなくショッキングなシーンを見

せつけるつもりだろ？

陸郎 そんなんでないに。

安音 そうそう。わいは部屋に戻るから。

陸郎 え？ そうなの？ 港まで来んの？

安音 うん、こんな格好だし……また、連絡するに。

陸郎 ……。

安音 (政和に) 明那おるよね？

政和 知らん！

安音 うん……（陸郎に）連絡するから。気をつけて帰ってね。
陸郎 おい……。

安音は家の中に入っていく。

陸郎 ……。

政和 で、なんだよ？

陸郎 は？

政和 せっかく出て来てやったに。わいはオマアと会いたくなんかなかったのに。
陸郎 ま、元気での。それだけ言おうと思って。じゃ、行くわ。

陸郎は淡々とさり、スールケースのハンドルをカシャって引き出し、そのまま去っていく。

政和 待てよ！

陸郎 ん？

政和 おいおいおい！ オマアはわいに会いたかったんだろ？
陸郎 会いたかったっていうか……弟だし顔くらいと思って。

政和 なのにそれだけか？ 元気でのって、カシャって、内容のあること喋れよ！

陸郎 時間ないに。

政和 待てって。なんかあるだろ？ わいに散々寂しい思いさせといて、更に安音を……、それに対してでいい。一言あるだろ？

陸郎 ああ、知らんかったに。ごめんな。……それに……わい、安音ちゃんどうなるか分かるんに。

政和 え？ どういうことだ？

陸郎 いや、なんか。安音ちゃん、少し迷っとる感じだこってん。

政和 迷っとる？

陸郎 こんなこと話しとる時間ないに。健也さんにも挨拶したいし。じゃ、またな。
政和 待て！ ちゃんと説明してから行け。

と、座り込む。

陸郎 はあ？ お前スフィックスか。

政和 安音が迷っとるってなんだ？

陸郎 ええ？ 本当、時間が……

政和 短く言えばいいだろ。

陸郎 (ちよっと困って) 多分、今まではこの家に対する反発があって、それが逆にわいへの気持ちになつとつたんだよ。わかる？

政和 いいから続けるよ。

陸郎 つまり、この家の中で自分が疎外されるところとって、それでわいに助けを求めとつたと。

政和 ……。

陸郎 それが……結婚してこの家を出るってみんなに告げて、急にこの家が大事に思えて来たっていうか、そういうアレなんでないかな。

政和 ……。

陸郎 ちよっとオママにとっては嬉しい情報だろ？

政和 話が難しすぎて分からんに。

陸郎 なんだそれ？

政和 昔からそうだに。兄貴は難しい話をしてわいをけむに巻いて。

陸郎 そんなことしとらんに。

政和 年離れとることってん！ 兄貴にとっては普通のことでも、小さいわいには難しいに！

陸郎 今はオママも大人でないか。

政和 うん。

陸郎 大きい体を大事にな。じゃ……。

と、政和は下手の方に消えていく。

政和はテラスを走って来て、

政和 兄貴！

陸郎は面倒臭そうに戻ってきて、

陸郎 ……え？

政和 わい、わいはな……本当にもう、もう兄貴なんかおらんとって過ごしたに！

陸郎 おう。

政和 久しぶりに話題に出たと思つたら安音とのことで、それもわいショックで。もうな、この世で一番憎い人間が兄貴だと再認識したに。

陸郎 そうか。

政和 そうだに。だから、だからオママが大嫌いだこってん！

陸郎 うん……わかったから、本当行くわ。

政和 けどな、けど……

陸郎 まだあるのか？ 健也さんに挨拶する時間……。

政和 けどな、昨日、わい、部屋に籠って、兄貴が健也さんたちとここで話して、それを、それを思うだけでそわそわして、下に兄貴がおる、兄貴がおると思うだけでそわそわして。

陸郎 ……。

政和 昨日も眠れなかったし、安音のことでショックなんだと思っちゃったけど、頭に巡るのは兄貴のことばかりで！ わいな……寂しかったに。兄貴がおらんで寂しかったに！

陸郎 おお。

政和 ずっとだこってん！ 噴火の時、まだわい中学生だに。母ちゃん達の葬式の後、兄貴が多田島からヘリコプターで東京に帰るっていうから、わい多田島まで行って……もうその船の中でたまらんかったに。兄貴が帰るのが辛くてたまらんかったに。

陸郎 オマア、ぶすつとしとったでないか。

政和 思春期は感情出すのが恥ずかしいに！

陸郎 なんだそれ。

政和 (ポケットから土偶のキーホルダーを出して) これ！ これ！ 兄貴とお揃いの土偶のGOO太郎のキーホルダー。わいな、わいな、まだ持つとるに。別れる時、多田島のスーパーで、兄貴が買ってくれたやつ、まだ持つとるに！

陸郎 おお。

と、アナウンス。

「本日の多田島行き第二便、いや、第二便、ちが、第一便が三十分後に出航いたします」

アナウンスの途中で、

陸郎 (笑って) 知ったったか？ この島内アナウンスしとる子、わい、高校の時付き合ってた子だに。

政和 え？

陸郎 ……行くわ。ああ、健也さんに挨拶する時間なくなったに……。

政和 ……。

陸郎はポケットからキーホルダーを出して、

陸郎 持つとるよ、わいも。

政和 (驚き慄く) えええ……。

陸郎 わいだってたまらん気持ちだったに、あの時。

政和 ……わいは、わいは今も……

陸郎 (かぶせるように) なんか寂しいに。不思議だこってん。兄弟ってなんだろうな？ 全

然一緒に暮らしたらんのに。みんなによろしく言っといてな。お盆にはまた来るこってん。

その時は一緒に墓参り行こう。

政和 ……。

と、陸郎は下手に消えて行く。

政和はその方向に何歩か進んで、

政和 ……お兄ちゃん……。

と、泣く。

上手から明那が出てきて、

明那 陸郎さん帰ったんか？

政和 (驚いて) あ、明那……。

明那 大きい声で喋って。わい、通れずに困ったわ。

政和 ……。

明那 それにしてもオマアは相変わらず持続できんなあ、怒りが。あんなに許せんって言っとったのにな。『兄貴、兄貴』って。

政和 オマア、人の話に聞き耳ばかり立てるな。

明那 勝手に入ってくるに。それにわいの先祖は忍者だこってん。

政和 本当か？

明那 嘘に決まっとするでないか。……ああ、困ったわ。

政和 どうした？

明那 多田島のスーパー行こうと思っただけで、陸郎さんと船一緒になるこってん。第一二便だと帰ってくるの夜になるし。明日はわい、パートが入っとするし。

政和 わいも今日は午後からバイトだし……。

明那 いや、いい。この家のことはわいがやるに。

政和 けど……。

と、石段から健也が作業着姿で走ってきて、

健也 栄司と茂は？

政和 え？

健也 そっか……ええ？　ここでないのか……。

明那 どうした？

健也 うん……どこに行ったんだ？

明那 だからどうした？

健也 栄司が仕事中にちよつと揉めてな。

明那 揉めた？　誰と？

健也 養殖場の横に、でっかいおかしなモニュメント作つとるだろ。それを邪魔だつて栄司が言い出して。それでアーティストの子らと揉めたこつてん。

明那 ええ？

健也 「よそ者は出てけ」つて栄司が言ったら「ちゃんと許可証あります」つて紙出して、したら……そこに茂のハンコがあつて、それであいつ、茂を許さんつて役場に向かつて。

政和 だったら役場でないのか？

健也 もちろん行つたわ。役場の中でしばらく怒鳴り合つたらしいわ。そのあと、そのまま二人で出てつたつて。

引き戸が開いて、安音が顔を出す。

明那 電話は？

健也 出んに。お、安音。

明那 栄司さん、朝から不機嫌だったに。安音のことが原因だと思うけど。

安音 ……。

健也 仕事でもいろいろあるんだわ。……昨日、網の一部が破れとることがわかつてな。対処したつもりだったんだけど、今日見たら随分と魚が逃げとるこつてん。

明那 安音のことでも腹立てとるに。

政和 明那！

健也 あいつら、どこで何をしとるんだ？

政和 話し合つとるだけでないの？

健也 いやあ、すぐに熱くなるに……小学校の時はいっつもあいつらつかみ合いで、高校の時なんて……栄司は鎖骨、茂は腕の骨を折つとるこつてん。

明那 (嬉しそうに) ああ、聞いたことあるわ。

政和 さすがに今はそんなことせんに。

健也 だったらいいけど、どつかでそういう喧嘩しとつたら困るなと思つて。

安音 行きそうなどこないの？

健也 うん。

安音 早く探そうよ。で、喧嘩止めんと。

明那 安音はいいわ。わいらで探すで。

安音 明那、意地悪言わんでよ。

明那 意地悪でないに。

安音 意地悪だに。

明那 安音にはこの家のことに口出して欲しくないだけだこってん。

健也 おい、明那。

明那 (子供の告げ口のように) だって、この子、自分で言ったに。健ちゃんたちのことは父親だと思つとらんつて。わいも姉妹でないつて。

安音 それは……。

健也 今、そんな話はいいに。

明那 よくないに。だから家族のことは家族でやらんと。

安音 わい、結婚なんかせんに。だから許して。

明那 はあ？

安音 ずっとおるに。この家におるに！

健也 おい、何を言つとるんだ？

明那 いい加減なこと言わんでよ。

政和 とにかく二人がどこにおるか探さんと。

健也 ……うん……

政和 健也さん、ほら、二人がそういう場合に行きそうなどこないの？

健也 高校の時までは喧嘩は決まった公園でしとったけど、噴火でそこもなくなつとるし。

勝手口から歩羽が出てくる。

歩羽 どうしたの？ なんか、朝から騒がしいに。

政和 栄司さんと茂さんがどっかで喧嘩しとるらしくて。

歩羽 え？

政和 もしかしたら殺し合いに発展するかもしれんくて。

歩羽 殺し合い？

健也 いや、そこまででないに。

歩羽 どこで？

政和 それを考えるとところ。

歩羽 うわ、大変、わいも探そうか？

明那 (冷たく) いや、いいに。うちら家族の問題だに。

歩羽 え……。

明那 (なぜか嬉しそうに) 健ちゃん、もう一回電話してみたら？
健也 うん……。

と、健也が電話を出す。

健也 (画面を見て) あ。

明那 どうした？

健也 知らん番号から七回も着信が。

明那 ほら！ オマア、音出るようにしとけ。

健也はそのまま電話する。

健也 (電話口に) ええ？……あ、わい、私、野々宮健也と言いますが、お電話いただいてたみたいで……あ、はい。

明那 なんだ？

健也 警察だった。

他 え……。

健也 今、横山という巡査が……

政和 横山？

健也 (電話口に) あ、はいはい……

政和 わいを下着泥棒と間違えて尋問したやつだに、横山。

健也 はあ……はあ……あ、そうです。はあ……はあ……そうなんです。分かりました。行きます。

と、電話を切る。

政和 つかまつとった？

健也 うん。栄司は拘留されとる。

他 はあ……。

政和 茂さんは？

健也 あいつはかなりの怪我をしまして病院におるらしいわ。

他 は？はあ？

健也 わい、栄司を迎えに行ってくるわ。

明那 あ、わいも。

政和 (同時に) もちろん、わいも。

健也 (吐き捨てるように) あいつら……こんなことになるようではもうダメだに。
政和 暴力はダメだに。

明那 そうやって仲ようやって来とるに。喧嘩するほど仲良いって言うでないか。
歩羽 怪我するまで喧嘩するのは違うでしょ？

明那 歩羽ちゃんには分からんって。

歩羽 ……。

健也 ま、とにかく迎えにいかんと。

明那 シゲの病院って、あの診療所だわな？

健也 じゃ、オマアら病院に。わい警察に行ってくるに。

安音 わいも行きたいんだけど。

明那 ……。

健也 安音はわいと一緒に来い。

安音 うん……。

健也 あ、なんか、身分証明いるって言っとったな……。

政和 (明那に) 待っというて。着替えてくるに。

と、健也は上手へ。政和は家の中に。

安音は入ろうとするが明那を見る。

歩羽 じゃあ、わいは……。

明那 (笑顔で) 歩羽ちゃん、いつもごめんねウチのこと。

歩羽 (やや不機嫌に) うん。

明那 (どこか自慢げに) もうウチは大変だこってん。

歩羽 ああ。

明那 先生みたいにちゃんとしとらんから。あれでお父さん代わりとか、もうね、笑うこって
ん。まるで子供だに。

歩羽 うん。

明那 わいがおらんとどうにもならんに。

歩羽 そんなことないでしょ？

明那 外から見とるだけじゃ分からんことあるに。

歩羽 ……。

安音が家の中に入ろうとすると、

歩羽は唐突に安音に向かって、

歩羽 あ、わい、安音ちゃんの結婚には賛成だよ。
安音 え？

歩羽 とにかく家を出ることに賛成。大賛成。

安音 ああ……。

安音は家の中に入っていく。

明那は歩羽を睨み、ゆっくり近づいてきて、

明那 (笑って) いきなり何？

歩羽 いや、わいの意見伝えとこうと思っただけ。

明那 歩羽ちゃんには聞いとらんけど。

歩羽 …… (笑って) でも、大人が六人で住んるのはおかしいもん。

明那 (笑って) ええ？そう？ 歩羽ちゃんどこより普通だこってん。

歩羽 うちは仲良いだけだから！

険悪な間。

明那 けどどうせその家からは出されるに。

歩羽 え？

明那 この辺り一帯、整備するらしいに。シゲが言っとった。

歩羽 いつ？

明那はそれには答えず、楽しそうに。

明那 ……だからわい、新しい家探そうと思っとるに。もっと海に近いとこ、広いテラスがあ
ってな、そこにきれいなテーブル置いて。海に近かったら健ちゃんたちが養殖場行くのも便
利だし。

歩羽 ……。

間。

だんだんと明那の笑顔崩れて行く。

明那 ……ごめん歩羽ちゃん。

歩羽 え？

明那 わい、今、性格最悪だに。自分で分かっとなるに。
歩羽 ……。

明那 でも、どうしようもないに。…安音が出て行くって言い出して、家が立ち退きでなくなるかもしれない、シゲと栄司さんが喧嘩して。政和もさつき、陸郎さんとやっぱり兄弟だとか話しとって。もう、もうな、この家はバラバラになりそうだこってん。

歩羽 ……。

明那は座って、

明那 歩羽ちゃん、土偶のG O O 太郎好きだった？

歩羽 あんまり好きじゃなかったに。あのアニメ、毎回、問題が起こりすぎて疲れるこってん。

明那 あれな、シリーズの中でG O O 太郎が十歳になるっていうエピソードが四回もあるらしいに。

歩羽 そうなの？

明那 安音と政和が言っとった。それにな、長老のミミズク爺やが間もなく死ぬっていうエピソードも三回あるって。

歩羽 うん……。

明那 でも一回も死んどらんに。

歩羽 ん？

明那 繰り返しとるこってん。あんだけ毎回問題起きるのに、何にも変わらず日常が続いとるこってん。

歩羽 ああ。

明那 わいG O O 太郎になりたいに。そのままがいい。もうな、わいの周りにおる人は一ミリも変わらずにおって、喧嘩しても次の日には何もなかったかのように関係が戻とって。

歩羽 (笑って) それは無理でしょ？

明那 無理か……。

歩羽 ま、気持ちはわかるけど。わいら、噴火を経験しとるで余計だに、きっと。

明那 ああ……。

明那はキョロキョロして、

明那 ……なんだ？

歩羽 は？

明那 なんか臭うに。なんだ？

歩羽 臭う？ああ、ハナニラでないの？その上、一面に咲いとるに。

明那 ああ、咲いとったなあ。でも、ここまでは臭わんに。

歩羽は寺田家を見て、

歩羽 ……あれ、花言葉、別れがどうか言うらしいよ。

明那は野々宮家を見て、

明那 そうか……そうかあ。

暗転。

第五場

ほぼ五ヶ月後。お盆の時期。

夏の午後。テラスにはTシャツ姿の栄司と健也が海を眺めている。

テラスの隅には陸郎のスーツケースと女性の旅行バッグが置いてある。

健也 ……多田島、きれいに見えとるに。

栄司 うん。

健也 オマア、大人になったらあそこまで泳ぐって言っとったな。

栄司 違うわ。わいは静岡まで泳ぐって言っとったに。

健也 そうだったか？

栄司 おう。もつと広い所に行きたかったこってん。

健也 へえ。

栄司 わいはこの島が嫌いだったでなあ。

健也 本当か？

栄司 そうだに。

健也 意外なこと言うのう。

栄司 ……わいがこの島に目覚めたのは噴火の後だこってん。

健也 ああ。

栄司 ……今日、あれは来るんか？

健也 は？

栄司 いや……茂は？

健也 そりゃ、来るよ。来るけど……直接、あいつに連絡したらいいだろ？
栄司 ……。

健也 茂だって待つとるに。

栄司 そんな訳ないわ。……考えたら小学校の頃からだに。あいつ、わいを嫌ったこつて
ん。

健也 (笑って) 今頃なにを言つとるんだ？

栄司 ……それに、わいと喧嘩であいつは腕の骨折つて。

健也 高校の時の話か？

栄司 そう、あれで絵がダメになったんだと思うに。

健也 はあ？ そのあと、茂、美大に合格したでないか。

栄司 ……今回も足首の骨……。

健也 あいつが勝手に落ちたんだろ？

栄司 わいが追い詰めたこつてん。

健也 悪いと思うなら茂に謝れ。

栄司 は？

健也 それだけに。

栄司 謝つたに。

健也 それでいいに。

栄司 けど、あいつがこの家に帰ってこんようになって半年だに。

健也 たった半年でないか。

栄司 ……。

健也 同じ学年は三人だぞ。嫌うも嫌わんもないこつてん。

間。

健也 オマア、あいつと切れたらいかに。

栄司 え？

健也 わいらは一生でごく限られた人とか出会えんに。

栄司 おう……。

健也 隣におるやつを掴んどかんと、オマアの世界なんてなくなるこつてん。

栄司 はあ？

健也 今日はいい機会だに。いい。わいが、わいがなんとかするに。(と、栄司を小突く)

栄司 なんだそりゃ？(と、健也の肩を叩く)

と、勝手口から千鶴夫が出てくる。

手には何枚かの写真を持っている。

千鶴夫 ……まだですか？

健也 あ、はい。

千鶴夫 探したんですけど、安音ちゃんが写ってる写真はこれだけです。(と、手渡す)

健也 (受け取って) あ、ありがとうございます。

千鶴夫 (お辞儀をして) 安音ちゃんにくれぐれもよろしく伝えておいてください。

健也 え？ なんですか？ 一緒に見送ってやってくださいよ。

千鶴夫 え？ けど、僕はダメなんですよね？

健也 どうして？

千鶴夫 前に栄司さんから聞いたんですけど。よそ者は見送れないって。

栄司 (慌てて) いや、先生はよそ者ではないに。ずっと隣で暮らしたんだし、しかも安

音を受け持ってくれたこともあるこつてん。

健也 ……そんな馬鹿らしいことやめましょうよ。

千鶴夫 はあ……。

健也 そんなの昔の話ですに。栄司！ オマア、そういう考えがダメなんだに。

栄司 違う。島の風習について話したただけだこつてん。

千鶴夫 いやあ、そういうニュアンスではなかったですけど。

健也 オマア……。

栄司 本当だに。そういう習わしがあるってことをだな。

健也 あった。

栄司 え？

健也 「ある」でないに。「あった」だに。

栄司 分かつとるよ。

健也 ……本当か？

栄司 本当だに。わいは、もう、考えを改めるこつてん。

健也 え？ 歩羽ちゃんは？

千鶴夫 すぐに戻るって言ってましたけど。

健也 出かけとるんですか？

千鶴夫 ……なんか……ええ……最近、あれなんですよ。

健也 ん？

千鶴夫 あのアーティストの子らと仲良くしてるらしくて。

健也 そうですか。

千鶴夫 どうやらいい雰囲気の、そういうアレがいるみたいで。

栄司 え？ そういうって……。

千鶴夫 よくわからないんですけど。

健也 あ、確かに歩羽ちゃんが手伝つとるのを見かけたことありますに。追悼公園で一緒に壁画描いとつたに。

千鶴夫 え？ 二人きりで？

健也 いや、グループでやつとつたけど。

千鶴夫 ああ。あの外国から来たっていう、ほら、背の低い男の子。彼も一緒にいました？

健也 さあ。

千鶴夫 どうもそいつなんですよ。最近、帰りも遅くって。

栄司 (笑って) 気になつとるこつてん。

千鶴夫 いや、僕は全然いいんですけど。

健也 だけど歩羽ちゃんと一緒に住むんでしょ？

千鶴夫 え？

健也 ここを出ても。

千鶴夫 あ、はい。来年からの話ですよね？ 静岡の私学ですけど教えなかつて言ってくれて。あそこなら歩羽の親戚もおりますし。

栄司 じゃ、どうせ外国の彼ともさよならですよ。

千鶴夫 (嬉しそうに) ま、そうなんですよ。

健也 そんなに気になつとるなら、茂が来たら聞いたらいいに。

千鶴夫 え？

健也 あの壁画、あいつがアーティストの子らと一緒に企画してやつとるこつてん。

千鶴夫 あ、そうなんですか。

栄司は立ち上がって、

栄司 なんか……この島もどんどん変わっていくに……。

健也 仕方ないに。

千鶴夫 あ、オコジョもいたんですもんね、昔は。

栄司 さすが先生、よう知つとる。そうです。ミソジマオコジョっていうのがおつて。珍しいつていうんで、昔はドイツからも研究チームが来とつたらしいですに。

千鶴夫 絶滅しちゃったんですよね？

健也 もう、ずいぶん昔のことだこつてん。

栄司 寂しいもんだに。

千鶴夫 けど、まだ、この島には色々あるじゃないですか。

栄司 何がある？

千鶴夫 レモンとか。

栄司 おお、他には？

千鶴夫 他って……レモンとか、いや、レモンとか。

栄司 レモンしか言っとらんでないか。

千鶴夫 だけど、他にありますか？

栄司 あ、あとは花萼がありますに。野生でこんなにまとまって咲いとるのは珍しいこってん。

千鶴夫 ああ。

健也 だけど、そんなもん、全部最近のもんだに。

栄司 は？

健也 花萼なんてわいらが小さい頃は咲いとらんかったこってん。でも、それでいいわ。

栄司 ……。

引き戸から段ボール箱を持った明那が出てくる。

明那 おい！ なんでわい一人にやらしとるんだ？

健也 悪い悪い。あったか？

明那 安音の写真はこれで全部だと思うに。

千鶴夫 だけど、これは面白い習慣ですよね。

栄司 何が？

千鶴夫 いや、島を出て行く人に、写真を全部渡すって。

栄司 え？ 他の場所ではやらんのか？

千鶴夫 ええ。聞いたことないですけど。この島に来た時、同じ写真を何枚も焼き増しするの見て不思議でしたもん。

栄司 へえ。

健也 『送り出し』って言って、家の玄関で写真の入った箱を渡すんです。だから昔はね、写真を入れる箱なんかも、こう、色々凝ったの作ったりして。

明那 ……どうしよう？ 段ボールだに。

健也 うん。しかも汚いでなあ。

栄司 もっといい箱あるだろ？

明那 何にも書いてないのこれだけだったこってん。

千鶴夫 え？ あ、うちにもっときれいなのあると思いますよ。探しましょうか？

栄司 そうしてもらるか？ それでは安音が可哀想だに。

明那 二人は？ まだ帰って来とらんのか？ あ、政和もか。

健也 安音のこと陸郎んとこ、両方の墓参りするって言っとったに。

明那 (笑って) 政和邪魔だこってん。

千鶴夫 まあ、陸郎君と安音ちゃんは今からはずっと一緒にいられるんですから。

と、石段から歩羽が出てくる。サイケデリックな模様の箱を持っている。

歩羽 ああ。

千鶴夫 おう。

歩羽 よかった。まだですよね？

健也 うん。

歩羽 (箱を見せて) ジャン。

そこには土偶のGOO太郎やタコの絵も描いてある。

千鶴夫 な、なにそれ？

歩羽 いや、写真入れる箱。あの人たちに頼んだの。

他 (箱に群がって) おお！

千鶴夫 あの人たちって……あいつか？

歩羽 え？ そうだけど。

明那 うわあ、それはいいわ。GOO太郎もついとるに。

栄司 あ！ これ、これ、スカートなの？

歩羽 安音ちゃんから見せてもらって。

栄司 ん？

歩羽 大事に持ってたみたいですよ、栄司さんに買ってもらったスカート。

栄司 ああ……。

栄司は上手の水場の方へ。

千鶴夫 (箱に描かれたタコを指して) これ口じゃなくて漏斗、これも足じゃなくて触手って知ってた？

歩羽 へえ。

健也 (顔を洗っている栄司を見て) オマア、もう泣いとるのか？

栄司 違うに。

歩羽 茂さんは？

明那 ああ…… (栄司に) 戻ってきてとる。

他 え？

明那 なんか、栄司さんに会いづらいつて、家の中におる。

栄司 ……そっか、戻って来とるか。

明那 呼んでくるか？

健也 そうしてやれ。

歩羽 じゃ、ほら、写真をこの箱に入れて。

栄司 おう。

明那は家の中に。

他は写真を歩羽の持ってきた箱に入れていく。

写真は全部バラバラ。

千鶴夫 これ、せめてアルバムとかにまとめとかないんですか？

栄司 こういうもんだに。

歩羽 わからなくなっちゃいますよね？

健也 これはね、島を出てった人間が、後で自分で整理するに。

歩羽 へえ。

健也 そうやって思い出してもらうってことだに。

歩羽 はいはい。

写真を皆で入れていく。

栄司 あ……おい……健也、これ。

健也 ん？

栄司は一枚の写真を見せる。

健也 おう……。

千鶴夫 なんですか？

と、皆が手を止めて覗き込む。

健也 ……この家で……初めて全員で撮った家族写真だに。

千鶴夫 え？ 初めてのなんですか？

栄司 これいつだ？

健也 ここ来て一年以上経ってからだに。安音は嫌だっかってずっと入らんかったに。

栄司 そうだったわなあ。

歩羽 これ、明那ちゃんと安音ちゃんは中学生ですか？

健也 そう。ほら、明那、海老のスカート履いとるに。
栄司 おう。

歩羽 けど……安音ちゃんの顔。

健也 うん。

千鶴夫 いつもこんな表情してましたよね。

栄司 (笑って) 怖い顔しとるに。

健也 なかなか……心を開かんかったでう。この頃になっても、毎日、夜になると隠れて泣いとつて。どうしてやることもできんで……辛かったに。

栄司 オマアも時々泣いとつたでないか。わい、知つとるに。

歩羽 みんなそうですよ。……この島の人は……夜になると泣いてたんですよ。

と、明那と茂が出てくる。

明那 何を見とるの？

健也 初めてみんなで撮った写真だに。

明那 え？

茂 おう、栄司。

栄司 あ、ああ……。

明那 (写真を見て) 懐かしい。

茂 (取って) 見せてくれ。……うわあ、二十年前か……。

明那 おい、わいも見とるに。

茂 うん……(笑って) そうだったわな。この頃、栄司、スキンヘッドにしとつたな。

栄司 この時は反省して頭を丸めとつたこつてん。

千鶴夫 なんの反省ですか？

栄司 帰ってきたばかりの茂と喧嘩して、腹立って……。

歩羽 何をしたんですか？

健也 茂の作品の上に落書きして……。

千鶴夫・歩羽 はあ？

健也 さすがにあの時は茂はめちやくちや怒つとつたなあ。

茂 わいが、唯一、賞をもらった絵だったんですよ。海の絵なんですけどこいつ、その上にチューリップ描きやがって。

健也 そう考えると……茂、オマアはえらいわ。普通、許せんに。

茂 明那が泣いて頼んだに。わいらが喧嘩するのは嫌だつて。

明那 覚えとらんわ。

と、石段から陸郎、安音、そして政和がやってくる。

栄司 なんだ？

茂 健也だろ、ここは。

明那 ほれ。

と、明那が箱を健也に渡す。

健也はテラスから下りて安音の前に、

陸郎 えらい派手な箱だこってん。

歩羽 わいが友達に作ってもらいましたに。

陸郎 羨ましいわ。わいにはこの島での写真、一枚もないに。

他 ああ。

政和 兄貴、わいらにはキーホルダーがあるでないか。

陸郎 おお。

政和 それにさつきも墓で何枚も撮ったに。

健也 よし、じゃ……安音、これ……。

と、安音に箱を渡す。

健也 わいらも来年にはこの家出るに。だから戻ってくる場所もないけど。

安音 うん。

栄司 (茂に) 明那と二人で住もうと言ったら断られたに。

茂 当たり前だろ？

明那 栄司さんと二人は辛いわ。

健也 ま、集まったらいいに。オマアの家はな、みんなだに。先生や歩羽ちゃんも含めて、こ

のみんながオマアの実家だに。

安音 そう思っとる。

健也 陸郎、オマアもな。

陸郎 ありがとう。結婚式はこっちでやるこってん。

健也 おう。……わいらが家族だったかどうか……それはこれから分かることだに。とにかく

元気でな。

安音 はい。

みんな拍手。

安音 ……あの、わいを引き取って、育ててくれて、本当に感謝しとる。最初は……

健也 (逃げていく) なんだ？ 挨拶とかだったらやめてくれよ。

栄司 そうそう。あのな、もうな、こういうのは古いに。わいらもな、この島もな、変わって
いかないかんに。

茂 もう行け。おい、陸郎。

陸郎 ああ……。

千鶴夫 いや、ほら、聞きましょうよ。

歩羽 そうですね。安音ちゃん。

皆は諦めて安音を見る。

安音 ……最初はわい、恨んで、どうしてこんなところにおらないかんのか、どうしても受け入
れられなくて。いや、正直、ずっとずっとそう思ってた。もしかしたらここを出るって皆
んなに言うまでそう思ってた。ここを家族だと思ふことが怖かったに。死んだお父さんや
お母さんがおらんくなる気がして……でもな、これからはきつと皆んなのことを思いながら
過ごすんだと思うに。あの、

と、島内アナウンス。

アナウンス 「本日の多田島行きのこと……」

陸郎 タイミング悪いなあ。

政和 あ、兄貴たちの邪魔しとるんでないのか？ だってこの子、昔……

陸郎 おい！

政和 ……。

アナウンス 「第二便が三十分後に出発、いや、出港いたします」

明那 シゲ、この子に原稿書いて読めって言っとけ。

茂 ああ……。

安音 政和。

政和 え？

安音 明那、先生、歩羽ちゃん……それからお父さんたち。

三人 ……。

健也、栄司、茂は立つ。

安音 今までありがとう。

音楽。

その風景は色あせて過去のものとなる。

その中で明那は安音にかけより抱きしめる。

政和が陸郎に荷物を渡そうとする。

栄司は茂の肩を叩く。

千鶴夫と歩羽は顔を見合わせ笑っている。

と、花火の音。

全員、そつちを見る。

その顔はそれぞれ独立した夏の日差しに照らし出されて。

おしまい。

